

2011年度 ゼミ論文

墨田区一寺言問地区におけるまちなかアートの役割

防災まちづくりとの関係性から考察する

主査 浦野正樹教授

早稲田大学 文化構想学部 社会構築論系 4年

浦野ゼミナール

1T080249-5

勝又 優希子

目次

序章 研究目的 (p 4 ~)

- [1] 問題意識・研究目的
- [2] 仮説 - インナーエリア 問題
- [3] 論文構成
- [4] 調査方法

第 1 章 一寺言問地区の地域特性 (p 7 ~)

- [1 - 1] 地理
- [1 - 2] 歴史 木造住宅密集地域の形成
- [1 - 3] 人口 少子高齢化の進行
- [1 - 4] 産業 地区内産業の衰退
- [1 - 5] 地域特性とインナーエリアが抱える問題の結び付き

第 2 章 一寺言問地区の防災まちづくり活動 (p 1 8 ~)

- [2 - 1] 住民主体の防災まちづくり活動の始まり
- [2 - 2] 防災まちづくり組織 “一言会” の設立
- [2 - 3] 一言会の活動
- [2 - 4] 一言会による防災まちづくりがもたらしたもの

第 3 章 防災まちづくりとアート活動の関係性 (p 2 9 ~)

- [3 - 1] 「まちなかアート」の誕生
- [3 - 2] 向島地域におけるアート活動の展開
- [3 - 3] 防災まちづくりとアート活動の関係性
 - (1) 防災まちづくりの流れを受け継いだアート活動
 - (2) アートが地域に根付く難しさ

第 4 章 一寺言問地区におけるまちなかアートの役割 (p 4 1 ~)

- [4 - 1] 向島地域のアート活動の紹介 3つの事例から
- [4 - 2] 一寺言問地区におけるまちなかアートの役割
 - (1) 向島地域のアート活動の特徴
 - (2) 一寺言問地区におけるまちなかアートの役割
 - (3) 地域におけるソーシャルネットワークの必要性

終章 論文のまとめ (p 5 0 ~)

- [1] まとめ
- [2] 論文の意義
- [3] 終わりに

参考文献・資料・参考URL (p 5 9 ~)

序章 研究目的

[1] 問題意識・研究目的

墨田区北部の向島地域に含まれる一寺言問（いちてらこととい）地区、通称 一言（ひとこと）地区では、1980年代から住民で構成される一言会による防災まちづくり活動が始まる。当時は住民が主体となって進めるまちづくりという前例が少なかったことから、新しい手法を取り入れた防災まちづくりの先駆けとして、全国から注目を集めてきた。防災まちづくり活動が一つの区切りを迎える1990年代後半からは、一言地区を含む向島地域全体においてアーティストを中心としたアート活動が展開されるようになる。

<もともとはアートが全くと言っていいほど存在しなかった向島地域において、なぜアート活動が展開されるようになったのか。アート活動の展開には同地域内の一言地区で進められてきた防災まちづくりが関係しているのではないか。>

調査を進めまち歩きを重ねる中で、私は上記の問題意識を持つようになった。

そこで上記の問題意識のもとに当論文では、

防災まちづくりとアート活動の関係性を明らかにすること。

両者の関係性をもとに一寺言問地区におけるまちなかアートの役割について考察を行うこと。

を研究目的とする。

[2] 仮説 インナーエリア 問題

問題意識で述べたように、1990年代後半から向島地域で展開されるアート活動には、1980年代後半から現在まで継続する一言地区における防災まちづくりが関係していると筆者は考えた。内容を先取りするようになるが、筆者が考える一言地区におけるアート活動の役割とは、

<ソーシャルネットワーク（人とまちのつながり・人と人のつながり）を構築すること>という結論を出した。これは

<防災まちづくりが抱えきれなかった課題を受け継ぐような形で、アートという新たなアプローチが地域に取り入れられるようになったのではないか。>

という仮説のもと、文献・先行研究・インタビューを通して防災とアートの両者に関する調査を進めた中から出した結論である。この仮説のもとになったのは インナーエリア

という考え方である。そこで[2]では文献¹を参考に、インナーエリアの考え方について整理する。

1 「大都市社会のリストラクチャリング」、高橋勇悦、1992 を参考にする。

(1) 東京におけるインナーエリア問題

東京には都心・副都心地域、墨田流域の城東地域、東京湾岸沿いの城南地域、荒川沿いの城北地域、新しい工場地域の城西地域や多摩地域などの工場集積地域がある。中でも都心・副都心地域と、墨田区が含まれる城東地域は東京の歴史的・伝統的な工業や独自の地域文化を持ち、同時に古くからの工場・商店・住宅が密集・混在している住工混在地域が多い。インナーエリアとは都心周辺高密度市街地、つまり墨田区を含む城東地域など、小規模製造業（自営業主層が多い）の集中した住工混在地域を指す。多くのインナーエリアでは、かつて工業生産に適合的な形で形成されてきた都市内部地域の街区形態（例えば町工場群や工場労働者の住宅街）や社会構造が、1970年代以降の先進資本主義社会の大都市における社会変動に対して柔軟な適応力を喪失し、様々な問題が生じている。インナーエリアが現在抱えている問題は数多く存在する。その中で最大の問題となるのは、低成長期における産業構造の転換がもたらした地区の地場産業の衰退・転出、急激な人口減少と高齢化という地域の衰退、低所得者層の滞留、家屋や施設の老朽化である。これらの問題は地域に何をもたらすのか。当論文の重要なキーワードとして、下町文化の衰退を提示する。

(2) インナーエリアにおける下町文化の衰退

下町文化とは何を指すのか。当論文ではまず「下町」を「製造業を中心とした中小企業や工場が集まることによる職住近接型の生活スタイルから育まれる地縁的人間関係が濃密な地域」と捉える。そして「下町文化」は親密で相互扶助的な社会関係が、近隣という非常に限られた空間的領域の中で緊密に編まれたネットワークとして維持されている点に特徴がある。

しかし職住近接型の生活スタイルにより育まれる地縁的人間関係を下町文化と捉えるならば、逆説的に考えると生活スタイルの変化は下町文化の衰退をもたらすということになる。自営業主層では職住一致型が多いことから、職場の社会関係が結局は居住地域内の社会関係に一元化され、近隣関係と未分離のネットワークの中に組み込まれることが多いのに対して、勤め人層は職住の空間的分離によって社会関係を脱地域化させてゆく。このように近隣関係に代表される地縁的社会関係の重要性は、地域外に職場を持たない自営業層・専業主婦層・無職高齢者層と、それを持つ勤め人層では大きく異なる。(1)で述べたインナーエリアが抱える様々な問題は相互の関連や連続性がある。先進資本主義社会における製造業から情報・サービス産業への産業構造・雇用構造の転換は、工場の転出・事業主の高齢化と後継者不足・国際競争の激化を招き、製造業などの地場産業の衰退をもたらす。地域の経済的活力が低下する。戦前・戦後の高度成長期を特徴づけたような人口流入は遮断され、若年層の学歴取得を媒介としたサラリーマン化、結婚などを契機とする地域外流出はこれに拍車をかける。代わりに高齢者は地域に残るため高齢化が進む。高齢化が進んだ地域ではもともとの敷地の狭さや接道条件の不備が重なって、住宅の更新が困難に

なり、住宅の老朽化や空き家が生まれる。これはさらなる高齢化につながる恐れがあり、一方で空き家や工場跡地のマンション・ビル化が進み、そこに都心通勤層が移入することで新住民層が生まれる。社会変動から生じるこれらの問題は職住近接型のライフスタイルの変化・住民の異質性の増大・人間関係の多元化を招き、結果的に地域内の社会関係は希薄化する。

このように下町文化の特徴を、住民の社会関係が近隣という非常に限られた空間的領域の中に存在する点にあるとするならば、社会変動により生じるインナーエリアが抱える問題は下町文化の衰退をもたらすのではないかと想定できる。インナーエリアにおける下町文化の衰退に関しては、結論につながる仮説<防災まちづくりが抱えきれなかった課題を受け継ぐような形で、アートという新たなアプローチが地域に取り入れられるようになったのではないかと。>を立てる上での重要な考え方として扱っていく。

[3] 論文構成

当論文は防災まちづくりとアート活動の関係性をもとに、一言地区におけるまちなかアートの役割について考察を行うことを研究目的とする。序章ではインナーエリアの考え方について整理し、インナーエリアが抱える問題は下町文化の衰退をもたらすことを述べた。第1章では地理・歴史・人口・産業という4つの項目から一言地区の地域特性を整理する。これにより一言地区の地域特性がインナーエリアが抱える問題に当てはまることを明らかにし、下町文化の衰退の危機にあることを証明する。さらにこれらの問題は相互に関係していることを述べる。第2章では一言会による防災まちづくり活動について整理する。防災まちづくりは地区内の防災性の向上に貢献し、後にアート活動が展開していく下地を作る。一方でソフトの部分のアプローチを模索する必要性が生じたため、防災まちづくりが抱えきれなかった課題を引き継ぐ形で、第3章で論じる向島地域におけるアート活動が展開する。アート活動は地域をポジティブな見方で捉え直し、その結果幅広い層の地域への関心や行動を呼び起こしてつながりを構築することを目指すものの、一言会の防災まちづくりに直接関わることは難しく、アートが住民の日常生活に根付くにはハードルが多いことが、インタビューを通して明らかになる。そこで第4章ではフィールドワークを通して筆者が感じたまちなかアートの特徴を整理した後に、一言地区におけるまちなかアートの役割について提言する。終章では論文のまとめと意義を述べる。

[4] 調査方法

- ・文献と先行研究の読み込み、統計データの分析。墨田区郷土資料館への訪問。
- ・一言会のA氏、現代美術製作所のB氏、アーティストのC氏・D氏へのインタビュー。
- ・フィールドワークとして、「路地サミット in すみだ」2011年10月21～23日、
「墨東まち見世 2011」2011年10月～12月 への参加。

第1章 一寺言問地区の地域特性

序章では多くのインナーエリアが抱える問題として、〈地場産業の衰退・転出、人口減少と高齢化、家屋や施設の老朽化〉を挙げた。東京都の城東地域に位置する墨田区は、小規模製造業（自営業主層が多い）の集中した住工混在地区であり、インナーエリアとして解釈できる。文献「大都市社会のリストラクチャリング」では、墨田区を地域社会の衰微・地域経済の停滞・市街地環境の衰微・社会的病理状況という4つの項目から6段階の評価で分析した。そして全ての項目において上から2番目以上の評価に当てはまるという結果を得て、墨田区はインナーエリアの問題群を抱えているというデータを提示した。そこで第1章では筆者が墨田区役所より入手した統計データと文献をもとに一言地区の地域特性を整理することで、上記の問題群が一言地区に当てはまるかを明らかにする。

[1-1] 地理

東京都の東部に位置する墨田区は23区中17番目の広さである（図1-1参照）。一言地区は墨田区の北西部に位置し、西側に流れる隅田川を挟み、台東区と隣り合わせになっている（図1-2参照）。一寺言問という地名はもともと存在していたわけではない。1985年に東京都が「防災生活圈モデル事業」を設けた際、防災生活圈として幹線道路に囲まれた4町丁目（向島5丁目、東向島1丁目、東向島3丁目、堤通1丁目）を合わせてできた地区である。外周の隅田川、明治通り、水戸街道、墨中通りを延焼遮断帯にすれば火をもらわずにすむという防災上独立したブロックでもある。一寺言問という地区名は防災活動の拠点に指定されていた第一寺島小学校・言問小学校の名前からつけられた。これら4町丁目にはそれぞれ特徴がある。

向島5丁目（図1-2では赤）：関東大震災後に区画整理され、料亭街を形成する。

東向島1丁目（緑）：住商工が混在し自営業を営む併用住宅が多い。入り組んだ狭い路地や木造住宅の密集など、一言地区内で最も防災上の課題を抱える。区全体と比べて人口密度が高く、1haあたり218.07人。

東向島3丁目（黄）：向島百花園や寺社などの名所旧跡が多い。

堤通1丁目（青）：隅田川の河川敷だった場所で大規模な倉庫や高層のオフィスビルが建つ。



墨田区は、東京23区中17番目の広さ

図1-1 墨田区役所 HP <http://www.city.sumida.lg.jp/index.html> より

図 1-2 墨田区勢概要 p19 の図より筆者作成

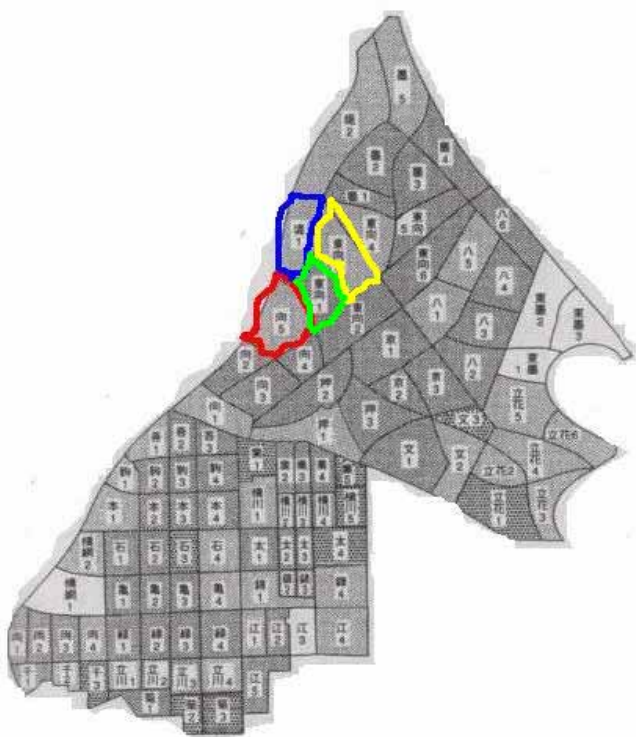


図 1-3 消防科学総合センターHP

http://www.isad.or.jp/cgi-bin/hp/index.cgi?ac1=IS01&ac2=h8jirei&ac3=132&Page=hpd_view より



図 1-3 から確認できるが、一言地区には細く入り組んだ路地が多く行き止まり路地もある。細い路地の上に住宅が密集しているため塀が無い住宅が多い。隣家との距離が近いことから一言地区では昔から近所付き合いが盛んである。一方でこのような路地や木造住宅は災害時には障壁となりうる。家屋の建替えや耐震化、避難時に通り抜けられるような路地の整備など、日頃からの防災対策が求められる地域でもある。

[1 - 2] 歴史 木造住宅密集地域の形成

一言地区の特徴である路地や木造住宅の形成過程を中心に、人口や産業との関係も視野に入れつつ、一言地区また向島地域の歴史（江戸時代以降）について文献をもとに整理する。

(1) 江戸時代

墨田区は大きく南半部の本所地域と北半部の向島地域に分けられる。徳川家康の江戸開府が契機になり南半部の本所地域の開拓が始まるが、本格化するのは1657年に発生し江戸市中をほぼ焼き尽くした振袖火事以降である。幕府は防火対策の必要性を認識して江戸の大改造に着手した。当時次第に不足しがちな市街地の造成（武家屋敷・寺院・町屋を

移転)や火除地(道路の拡張など)を求め、まだ湿地帯であった本所地域に目を付けた。

1659年には豎川や横十間川などの堀割開削を進めるとともに低湿地を埋め立てる。水はけを良くし埋立地を整備して、碁盤の目のように整然とした街並みと道路を作り、元禄年間(1688-1704)には明治時代に引き継がれる形まで造成が進む。本所地域は武家地・町人地・寺社地・百姓地が混在する独特の景観を形成していく。また相撲や花火の名所となり、盛り場の形成もあいまって人々を惹きつける遊興の場へと発展した。

北部の向島地域は巨大消費都市江戸への農産物供給地として発展し、田園や別荘地などのどかな風景が広がった。隅田川沿いは桜の植樹により景勝地「墨堤」を生み、観光文化の拠点となった。墨堤には田園と入江などのどかな自然風景が広がり、景勝地・行楽地・別荘地として庶民や文人墨客を惹きつけた。人が集まるために料理屋が繁盛し、以後続く料亭文化が生まれた。

(2) 明治時代

明治時代には工業の躍進と東京の発展に伴い、墨田区域には多くの工場が建てられ、近代産業の中心地として発展する。工場の設立は街並みが整備されて武家屋敷の跡地を取得でき、水運の便が良い本所地域から始まるが、同じく水運の便が良く地価が安い向島地域にも波及する。武家屋敷が密集した本所地域、農村地帯の向島地域は以後近代的な工業地帯に変貌していく。工場の業種は多種に渡るが、中でも大規模で活況を呈したのが紡績と機械工業である。本所地域では明治2年にガラス・皮革工場が製造を開始し、その後石鹸・メリヤス工場など近代的大工場が建ち並ぶ。向島地域は明治22年に鐘ヶ淵紡績会社が製造を開始し、向島須崎町の花王石鹸、東京モスリンの毛織物製造、鳥居レンガ工場などが続々輩出した。日清日露の二大戦争後には需要の増した皮製品の原料生産で大躍進した。

(3) 大正時代

大正時代には大正3年の第一次世界大戦の軍需景気で海外への輸出を伸ばし、墨田区域の紡織工場は国内繊維産業を盛況に導く原動力になった。工業地域として発展する墨田区域だが、大正12年(1923)の関東大震災により大きな被害を受け、本所地域の95%、向島地域の45%が消失する。しかし関東大震災後に向島地域の密集市街地が急速に進むことになる。被害の大きい本所地域は帝都復興計画により大規模な土地区画整理が行われる。比較的被害の少ない向島地域は帝都復興計画の区域外であったが、地価が安いこともあり、焼け跡の整地が行われる前に、震災前にも増して日常消費品生産をする大中小の工場や下請けの町工場などが殺到した。ここに労働者として本所地域や墨田区域以外から職工・商人層の流入・定着が加速し、昭和15年(1940)頃にかけて墨田区の人口が増加する。多数の労働者の移住に伴い、棟割長屋・借家・アパートなどの住宅や、日用品を供給する小商業・飲食店・娯楽機関が営まれるようになる。当時は建築規制が無かったため、これらの建物は田んぼ・畑地・狭い路地・行き止まり路地など、空いている土地を侵食す

るように建てられた。このようにして田園地帯の名残は薄れて無秩序な不良住宅の密集地帯に変貌し、現在の向島の原型となる。向島に入り組んだ細い路地が多いのは田畑や畦道をそのまま埋め立てたために生じたものである。

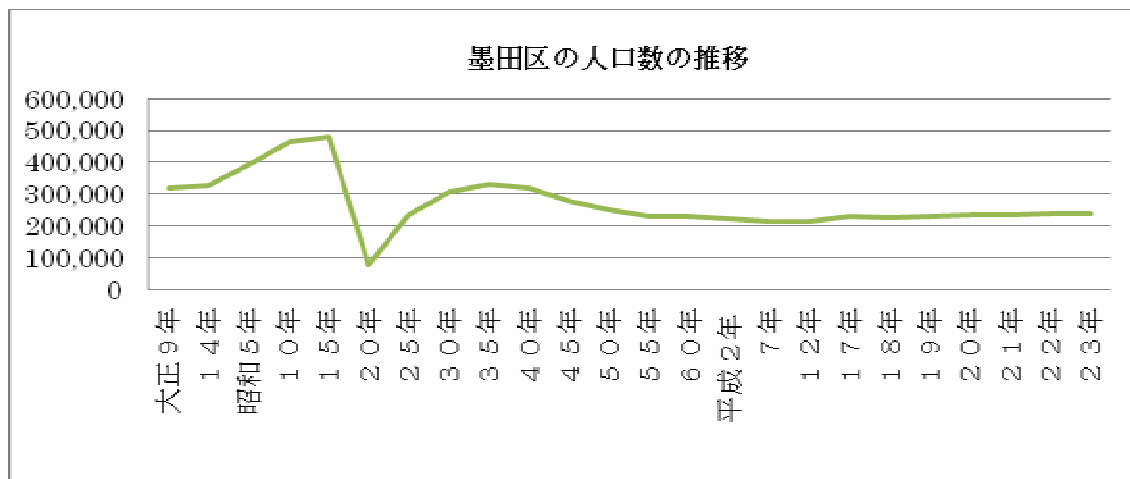
(4) 昭和時代

関東大震災復興後に東京有数の工業地域として発展した墨田区域だが、昭和20年(1945)の東京大空襲を始めとした空襲を数度受け、本所区の96%、向島区の57%が焦土となる。住宅・商店・工場が壊滅的な被害を受け、多くの人命が失われ人口は戦前の25%まで減少する。しかし中央区や台東区など問屋街の後背地に位置していることもあり、本所区と向島区が統合して墨田区が誕生した昭和22年頃から復興が進む。

昭和25年の朝鮮戦争の影響で特需景気となり、東京における日用消費財の流通生産システムの末端に連なる加工業者の集積を促し、繊維産業を中心に墨田区の産業全般が活性化する。地価が安く河川による材料運搬が可能な向島地域には下請や関連家内工場が集積し、それに伴い人口集中も激化する。迷路のような路地や被災・延焼をまぬがれた木造老朽家屋はそのまま残ると同時に、長屋などの低廉な住宅が供給され、さらに土地所有関係の錯綜とも相まって、現在まで続く細く入り組んだ路地における木造住宅密集地域が再び形成されていく。

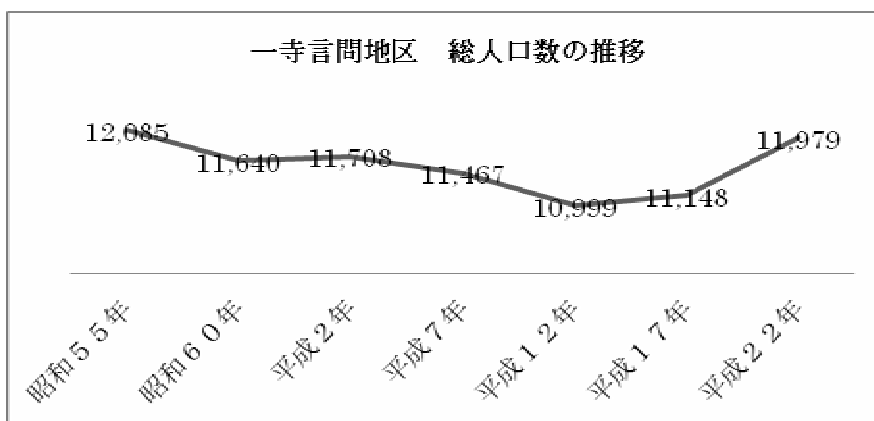
[1-3] 人口 少子高齢化の進行

グラフ 1-1 (墨田区役所 HP、墨田区基本計画より筆者作成)



まず始めにグラフ 1-1 より墨田区の人口に注目する。明治時代から太平洋戦争に至るまで、墨田区域が近代産業の中心地として発展する。工場が集積して労働者が増加することから、昭和15年頃まで人口が増加する。昭和20年の終戦時には多くの人命が失われたことから人口が激減する。しかしその後の特需景気に伴い再び産業が発展して工場が集積することから、昭和40年頃にかけて人口が増加していく。昭和40年代の人口減少は、それ以

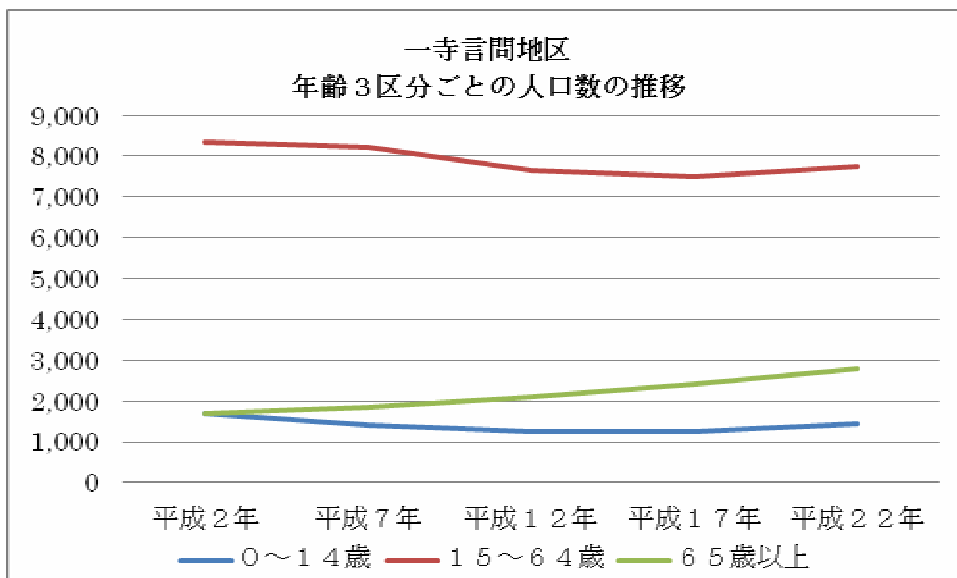
前の若年未熟練労働者に依存していた製造業が、第三次産業の雇用機会の拡大・賃金水準の上昇・高学歴化の進展などの変化によって雇用力を失い、若年労働者が減少したことに起因している。こうした減少は大工場の移転によるよりも、数人から数十人の単位で中小工場に採用されていた労働者の減少による面が強い。昭和50年代になると工場跡地などに建設されるマンションや公的住宅による人口増加が減少を相殺することによって、区全体の人口減少は次第に小さくなっている。これは墨田区が製造業を中心とした商工業のまちにマンションや公的住宅が建設されることで、生活や意識の質が異なる新住民ともいえる住民層が住み始めるようになることを意味する。



グラフ 1-2

グラフ 1-3

(区役所より入手した統計データをもとに筆者作成)



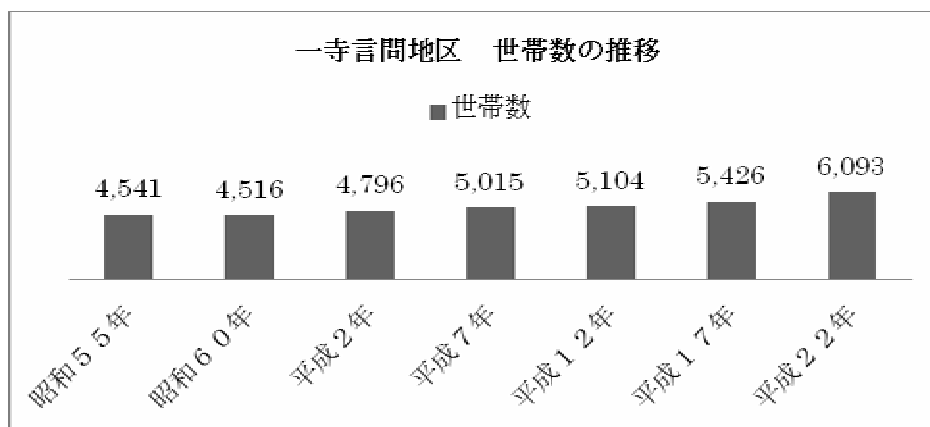
それでは次にグラフ 1-2 と 1-3 より一言地区の人口に注目する。両グラフは平成以降に焦点を当てたものである。これは次章以降で論じる防災まちづくりの開始時（平成の始め）

とアート活動の展開時（平成10年前後）の一言地区の人口について整理しておきたいと考えたからである。

グラフ1-2によると、一言地区の総人口は昭和55年から平成12年にかけて減少傾向にあるが、その後は増加している。アート活動が展開され始める1990年代後半から2000年頃（平成12年前後）に注目すると人口が減少している。

グラフ1-3によると、平成以降の0～14歳と15歳～64歳の人口が横這いである一方で、65歳以上の人口が徐々に増加している。総人口における65歳以上の割合は、平成2年（14.3%）平成7年（16%）平成12年（19.1%）平成17年（21.5%）平成22年（23.2%）のように年々高くなっている。特に近年は23%を超えており、墨田区全体の65歳以上の割合が21%であることと比較しても、一言地区では高齢化が深刻な状況にある。

グラフ1-4 （区役所より入手した統計データをもとに筆者作成）



墨田区の世帯数は戦後ほぼ一貫して増加傾向が続くが、世帯あたり人員の縮小が進んでいる。グラフ1-4より、年々世帯数が増加している一言地区も同じような状況にあると考えることができ、単身世帯の増加や核家族化が進行していると想定できる。

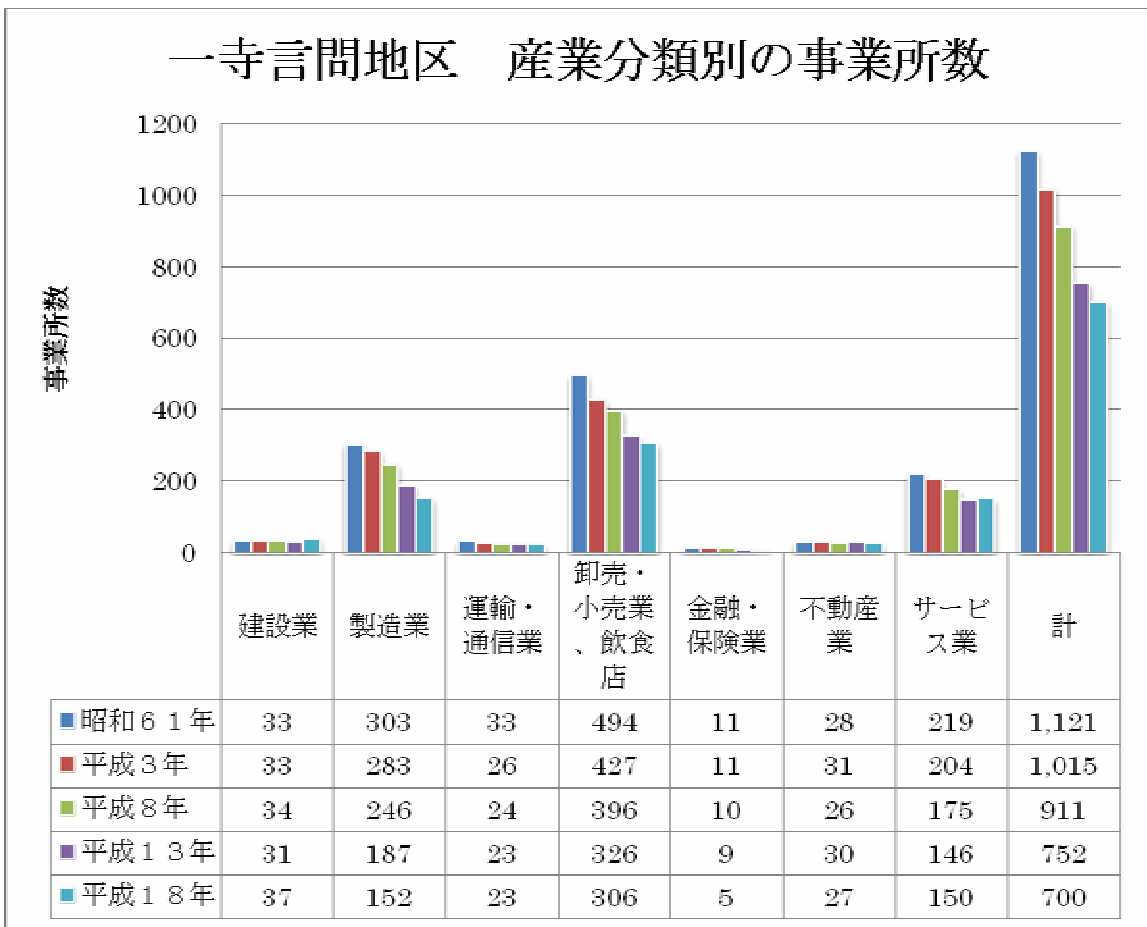
[2-4] 産業 地区内産業の衰退

墨田区役所より入手した統計データ（産業分類別の事業所数、従業員規模別の事業所数に関する）と墨田区役所HPを参考にグラフを作成し、一言地区の産業について整理する。



グラフ 1-5

グラフ 1-6



グラフ 1-7 一寺言問地区 総事業所数において製造業が占める割合

昭和61年 平成3年 平成8年 平成13年 平成18年

27.0%

27.9%

27.0%

24.9%

21.7%

明治時代に入り東京の発展と産業化が進む中で、水運の便が良く都心に近い墨田区域の工業化が進み、大中小の工場が続々と建設されていく。その中で中心となるのは製造業であり、地域の経済や産業を支えてきた。日常生活必需品を中心に、金属部品加工、ニットの縫製・加工、皮革・袋物加工、ゴムやプラスチック加工など、戦前以来の伝統を持つ様々な業種が集積し、世界に誇れるような技術を持つ工場や製品も多い。しかし墨田区では他の工業地域に先立って1960年代前半から大工場の地域外移転が始まり、60年代と70年代を通じて小零細化の増加とその比重の上昇、さらに80年代に入り工場数の減少と小零細化の同時進行という経過をたどり、東京都はもとより国内での位置を低下させてきた。これには製造業を中心とした第二次産業からサービス業を中心とした第三次産業への産業構造の転換・新技術の急速な進展・国際競争の激化・新規参入の停滞・有力企業の地域外への転出・一代性事業主の高齢化と後継者不足・自然廃業といった複数の要因が関係する。区内の工場の多くが末端の下請機能を担う小零細規模経営であるため、全体的な経済状況の強い影響下にあり、製造業の衰退は地域経済に影響を及ぼす。大都市立地や家族主体の小零細工場ゆえの供給の柔軟性と、他業種コンプレックスエリアである利点を生かして、消費者の選択的趣向や高級志向に対応した多品種少量生産による活性化の模索が続けられている。

次に上記の3つのグラフより、一言地区の産業について整理する。グラフ1-7からは墨田区と同様に一言地区でも全産業に占める製造業の割合が高い(東京都全体では9.1%)ことが分かる。グラフ1-5より各年において従業員19人以下の事業所(工場も含む)が全体の9割以上を占めることから、自宅の1階や隣接した土地を工場にするなどした小規模事業所が多いことが分かる。このように一言地区の産業の特徴は墨田区と同様に製造業が中心で、小規模の工場や事業所が多い点にある。そのため一言地区では近所の町工場や自宅の工場で働いている人が多く仕事の場と生活の場が一致していることから、昔から近隣関係を大切にしてきた。

しかしグラフ1-5と1-6より、製造業を始めとした各分類別の事業所数、また総事業所数は平成に入る頃から現在まで減少している。この傾向は従業員19人以下の小規模事業所で顕著である。理由としては墨田区の産業が抱える要因と同様であり、さらに工場の集積がもともと狭小な空間に制約されていることも関係する。墨田区と同様に一言地区の産業が厳しい状況に置かれている中で地区外に働きに出る人も増加しており、一言地区の特徴である職住一体となったライフスタイルや、そこから育まれる近隣関係を中心とした緊密な人間関係にも変化が生じていると想定できる。また廃業による空き店舗や空き工場は、災害時における倒壊の危険性や放火の恐れがあると同時に地域の景観を損なう。防災防犯面や環境面で多くの問題を抱えている空き店舗や空き工場は地域の重要な課題であり、次章以降で論じるまちづくりに大きく関わる。

[1 - 5] 地域特性とインナーエリアが抱える問題の結び付き

多くのインナーエリアが抱える問題として、＜家屋や施設の老朽化、地場産業の衰退・転出、人口減少と高齢化＞を挙げた。[1 - 4]までで整理した一言地区の地域特性はこれらの問題群とどのように結び付くかを、図 1-4 を参照しながら考える。

(1) 家屋や施設の老朽化

地価が安く水運の便が良いなど地理的好条件にある向島地域には、明治時代以降の産業化や東京の発展に伴い工場や住宅が急激に増加した。農村であった土地が整地される前に建設ラッシュが進んだため、細く曲がりくねった路地に木造住宅密集地域が形成され、現在まで続いている。一言地区を実際に歩くと特徴的なカーブのある道や木造住宅を目にすることから、家屋や施設の老朽化という問題を抱えていると判断できる。

(2) 地場産業の衰退・転出

産業化が進む中で一言地区では製造業の割合が高く、地域の経済を支えてきた。中でも小規模事業所が目立ち近所の町工場や自宅の工場で働いている人が多いことから、職住一体の生活スタイルから生じる近隣関係を中心とした緊密な人間関係が育まれてきた。しかし経済状況など複数の社会変動を受け、製造業を始めとした各分類別の事業所数は減少している。この傾向はまちづくりが展開する平成に入ってから続く。地区外に働きに出る人も増加しており、職住一体の生活スタイルから生じる緊密な人間関係にも変化があると想定できる。以上より一言地区では地場産業（製造業）の衰退・転出という問題を抱えていると判断できる。

(3) 人口減少と高齢化

一言地区では平成に入る頃から平成 12 年にかけて人口が減少している。一概にはいえないが、これには地場産業の衰退・転出が関係していると考えられる。現在は微増傾向にあり、これには工場跡地などに建設されたマンションに居住する新住民層ともいえる住民が増加したことが関係していると考えられる。さらに 65 歳以上の人口が増え続けており、高齢化が深刻である。以上より一言地区では人口減少と高齢化という問題を抱えていると判断できる。

(4) インナーエリアにおける下町文化の衰退

以上より一言地区にはインナーエリアが抱える問題群が当てはまることが明らかになった。序章では「インナーエリアが抱える問題は下町文化の衰退をもたらす」と述べた。そのため一言地区においても下町文化（親密で相互扶助的な社会関係が、近隣という非常に限られた空間的領域の中で緊密に編まれたネットワークとして維持されていること）の衰

退といえる状況にあるのではと想定できる。この問題は防災まちづくりを経てアート活動が展開する過程に大きく関わる。また序章で述べたようにインナーエリアが抱える問題群は独立しているのではなく、相互に関連し合っている。一言地区では特に防災上の課題の解決が急務であったことから、次章で詳しく論じる防災まちづくりがスタートすることになるが、まちづくりを行う上では相互に関係しているこれらの問題を視野に入れる必要がある。

図 1-4 一寺言問地区の地域特性（筆者作成）

江戸時代 ・ ・ 江戸の大改造に着手

< 本所地域 >

1657 年の振袖火事以降の開拓 1700 年には整然とした街並みと道路の完成
武家地・町人地・寺社地・百姓地が入り混じる独特の
景観を形成

< 向島地域 >

江戸への農産物供給地として発展

隅田川沿いは景勝地・行楽地・別荘地として多くの人を訪れる 料亭文化の生成

明治時代 ・ ・ 東京の発展と産業化

地価が安く水運の便が良いなど地理的好条件にある墨田区域には近代的な工場が続々と建てられ、近代産業の中心地として発展していく。（例 1890 年 鐘ヶ淵紡績会社）

大正時代

1914 年 第一次世界大戦後 墨田区域の紡織工場は国内繊維産業を盛況に導く原動力

1923 年 関東大震災 墨田区域は大きな被害を受ける



< 向島地域 >

日常消費品生産をする大中小の工場や下請けの町工場が殺到

労働者が集まり、墨田区域の人口が増加する（1940 年頃まで）

労働者のための住宅・飲食店・娯楽機関が多数建てられる

田園地帯の名残は薄れ、無秩序な不良住宅の密集地帯に変貌していく

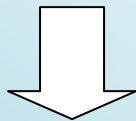
昭和時代～平成

1945年 太平洋戦争により墨田区域は壊滅的な被害 人口は戦前の25%にまで減少

1947年 本所区と向島区が統合して墨田区が誕生 地理的好条件により復興が進む

1950年 朝鮮戦争による特需景気

- ・墨田区の産業全般が活性化
- ・向島地域では下請工場や関連家内工場が集積 再び人口の増加（1965年頃まで）
細く入り組んだ路地における木造住宅密集地域が再形成



複数の要因
(産業構造の転換、高齢化と後継者不足)

1960年代前半 大工場の地域外移転

1960年代～70年代 小零細化の増加とその比重の上昇

1980年代 工場数の減少と小零細化の同時進行

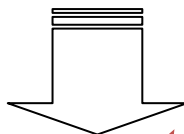
- ・東京都はもとより国内で占める位置の低下
一言地区では事業所数の減少（小規模事業所で顕著）
廃業による空き店舗や空き工場は防災防犯面や環境面で多くの問題
- ・製造業が雇用力を失い若年労働者が減少
人口の減少と深刻な高齢化
職住一体となったライフスタイルや、そこから育まれる近隣関係を中心とした
緊密な人間関係の変化
- ・マンション建設などによる人口増加により人口減少は小さくなる
生活や意識の質が異なる住民層（新住民）が住み始める

インナーエリアが抱える問題群 = 一寺言問地区の地域特性

家屋や施設の老朽化

地場産業の衰退・転出

人口減少と高齢化



下町文化の衰退へ

第2章 一寺言問地区の防災まちづくり活動

第1章より一言地区は多くのインナーエリアが抱える問題に当てはまることが明らかになった。各問題は相互に関連する中で、一言地区では特に防災上の課題の解決が急務であったことから、1980年代後半より防災まちづくり組織“一言会”による防災まちづくり活動が始まる。当論文では防災まちづくりとの関係性をもとに一言地区におけるまちなかアートの役割について考察を行うことを研究目的としている。そこで第2章では文献・先行研究・一言会が発行する防災まちづくり瓦版・一言会のA氏へのインタビューを参考に、一言地区の防災まちづくり活動を整理する。

[2-1] 住民主体の防災まちづくり活動の始まり

第1章でも紹介したが墨田区は地盤が弱く路地や老朽化した木造住宅が多い。東京都が行った評価によると、危険なまちのベスト10に墨田区内の3つの地域がランクインした。墨田区は関東大震災や東京大空襲で多くの人命や財産を失った経験から、防災対策を区政の重要課題として位置づけ、1980年に『防災区画化計画』を策定した。防災まちづくり瓦版の第1号と7号によると、「区内全域を不燃建築物や河川などの延焼遮断帯で分割した25の区画に分けること。その上で物的な面では大通り沿いの建物を不燃化して延焼遮断帯を作ること、人的な面では小学校を拠点にして消防・救護・情報活動が行えるようにすることを定め、区画内の防災態勢の整備と強化を目指す計画」である。そしてこの計画の実現に向け、1985年に『防災生活圏モデル事業』を設けた。これは幹線道路沿道の不燃化・内部市街地の防災性能の向上・防災コミュニティの育成など地区レベルの課題に焦点を当てたものであり、モデル地区は活動費の助成を受けられる。このモデル地区に向島5丁目・東向島1丁目・東向島3丁目・堤通1丁目から成る一寺言問地区として指定された。

近隣の京島地域では先行して1980年頃から防災まちづくりが始まる。しかし行政主導による住民感情や生活設計を軽視した強引な進め方が反発を生み、まちづくりが頓挫するという事態に陥った。また一言地区が抱える課題は連鎖的であると同時に住民の生活に関わるため、外部の力だけで再生するには限界がある。そこで墨田区の担当部局は一言地区では住民主導によるまちづくりを進めようと考えた。瓦版の第1号には「隣近所との親しい付き合いがまちの良さであり、いざという時に助け合えるまちが被害を少なくさせる」と書かれていることから、地域の内発的な力を呼び覚ましたまちづくりを目指していたことが分かる。

当時の一言地区では町内会や商店会が避難訓練や祭りを開催しており、地域における存在は大きかった。一方でそれほど人数が多くない割に青少年健全育成・高齢者福祉・ゴミ問題など幅広い仕事を抱えていたため、専門的に防災まちづくりに携わる組織が必要だった。また一寺言問という防災生活圏のまとまりを作るには町会の垣根を乗り越える必要が

あった。以上の理由から一言地区では、防災に関心のある住民有志を募り防災まちづくりを進めることになる。

まちづくりを技術的に援助するために墨田区が選んだ都市計画コンサルタントは、住民有志を募るため、区職員が演技者となり芝居でまちづくりの説明会を開くこと、まちづくり瓦版を発行して住民に情報発信することを提案した。これによりまちづくりに意欲があり信頼感を築き合えるような人達を集め、1985年10月に14名の住民から構成される“わいわい会”が結成された。住民自身が知恵を出し合い、墨田区と専門家が必要に応じて活動を支援するという体制のもと、できるところから少しずつ時間をかけて取り組む修復型まちづくりというスタンスを取った。そして「より安心して暮らせるまち・うるおいのあるまち」を目標に、住民が中心となってまちの良さを活かした防災まちづくりを進めようとしている。

わいわい会の活動内容は大きく3点に分けられる。1点目はワークショップである。地図を用いて地区の歴史を勉強した後、実際に地区内を歩きまちの危険な所や大切にしたい所を発見しアイデアを出し合った。これらを住民に情報発信するため、活動内容の2点目である防災まちづくり瓦版を発行した。そして1年間の総決算として、活動内容の3点目である「一言祭」という防災イベントを開催した。活動を紹介することで地域を挙げて防災まちづくりの気運を盛り上げること、一言祭を通してより広範な範囲の住民が参加するまちづくり組織を作ることを目的とした。そして一言祭をきっかけとして1986年12月に、“一寺言問を防災のまちにする会”通称“一言会”が結成された。

[3 - 2] 防災まちづくり組織“一言会”の設立

一言会は「災害が起きても逃げ出さなくてよいまち」「百年後に残せるまち」を目標に掲げ、より多くの人気が気軽に一言いえるような住民主体の活動を進める。一言会は6つの町会（向島五丁目西町会、向島五丁目東町会、東向島一丁目中町会、東向島一南町会、東向島宮元町会、堤通一丁目町会）とわいわい会で構成される。わいわい会のメンバーと6つの町会から3人ずつ選出された理事が議決機関として理事会を組織し、理事会が中心となり一言会の運営を担う。町会を含むようになった理由としては、防災まちづくりの広報や情報発信には地域に根付く町会の基盤が必要なため、町会を加えることでわいわい会の活動が地域から浮くのを防ぐためである。一言会での提案や考慮事項を理事会に参加した町会の役員が持ち帰り町会内で検討することで、町会活動にも反映できる仕組みになっている。

一言会が最初に行った活動は、一言地区の将来像とまちづくりの大筋をまとめた『防災まちづくり計画』の検討作業である。これはもともとわいわい会が作成していたものであるが、墨田区長への提案に向け、住民とのワークショップや情報発信を行うことで修正が施された。提案後は区が計画を尊重して施策化・事業化し実施計画を住民に再提案する

住民は実施計画について協議し合意したものを実施する。住民からの要求の明らかなものや住民自身でできるものは行政に再提案することが決められた。一言会の防災まちづくり活動を把握するのに有効であるため、1987年の『防災まちづくり計画』（瓦版第11号を参照）の内容を紹介する。

<p>< 1 > まちの将来像 「安心とるおいのあるまち」</p> <p>高齢者が住みやすく、若者も住みたくなり、子供達に誇れるまち</p> <p>近所付き合いの良さを受け継いだ、まとまりのあるまち</p> <p>地元の産業が活発な、賑わいのあるまち</p> <p>緑が豊かで、四季の変化を感じさせるまち</p> <p>人が訪れてきたくなるような、まちそのものが魅力的なまち</p> <p>地震がいつ来ても安心して住める災害に強いまち</p>															
<p>< 2 > 防災まちづくりの目標</p> <p>火を出さない、もらわないまち</p> <p>災害に対応できるまち</p> <p>ぬくもりの感じられるまち</p>															
<p>< 3 > 計画の内容</p> <table border="0"> <tr> <td>木造密集地区の安全性を高めていく</td> <td>延焼遮断帯を形成する</td> </tr> <tr> <td>道路を広く利用する</td> <td>交差点の隔切りをする</td> </tr> <tr> <td>防災活動の拠点をつくる</td> <td>防災活動拠点に接続する道路を安全なものにする</td> </tr> <tr> <td>防災広場をつくる</td> <td>寺社などを応急利用施設として結ぶ</td> </tr> <tr> <td>隅田川沿いの空間を魅力的にする</td> <td>墨堤の桜を再生する</td> </tr> <tr> <td>防災活動拠点会議を開く</td> <td>路地尊を置く</td> </tr> <tr> <td>防災まちづくりの学習、相談活動を進める</td> <td>防災まちづくりの功労者を表彰する</td> </tr> </table>		木造密集地区の安全性を高めていく	延焼遮断帯を形成する	道路を広く利用する	交差点の隔切りをする	防災活動の拠点をつくる	防災活動拠点に接続する道路を安全なものにする	防災広場をつくる	寺社などを応急利用施設として結ぶ	隅田川沿いの空間を魅力的にする	墨堤の桜を再生する	防災活動拠点会議を開く	路地尊を置く	防災まちづくりの学習、相談活動を進める	防災まちづくりの功労者を表彰する
木造密集地区の安全性を高めていく	延焼遮断帯を形成する														
道路を広く利用する	交差点の隔切りをする														
防災活動の拠点をつくる	防災活動拠点に接続する道路を安全なものにする														
防災広場をつくる	寺社などを応急利用施設として結ぶ														
隅田川沿いの空間を魅力的にする	墨堤の桜を再生する														
防災活動拠点会議を開く	路地尊を置く														
防災まちづくりの学習、相談活動を進める	防災まちづくりの功労者を表彰する														
<p>< 4 > 防災まちづくりの進め方</p> <p>住民同士の人をつなぐを大事にする</p> <p>できることから少しずつ、そして具体的な計画を考えながら</p> <p>住民と行政が協力しながら、そして互いに役割を分担しながら</p>															

これを見ると< 1 >のまちの将来像では、高齢者の生活のしやすさ、産業の活性化、老朽家屋の安全性向上、近所付き合いの良さを維持に関する内容となっていることから、第1章で整理したインナーエリアが抱える問題や下町文化の衰退といった問題が、一言地区の地域課題として認識されていたことが分かる。このようにまちづくりを狭義の防災にとどめず、福祉・景観・環境保全などの関連分野にまで広げている点に特徴がある。一方で< 2 >の目標や< 3 >の計画内容は防災性能を高める項目になっている。このことから一言地区では深刻な防災上の課題を抱えており防災生活圏モデル事業に指定されたため、まずは防災を中心としたまちづくりが展開していったと考えられる。そして

< 4 >にある住民同士のつながりや、瓦版の第1号に「今あるものを活用したまちづくり」とあるように、まちの良さや資源を生かした防災まちづくりを進めようとしている点に特徴がある。

墨田区は一言会の防災まちづくり計画を踏まえて関係部局による検討を重ね、1988年3月に『一寺言問地区整備計画』をまとめた。一言会の計画案がほぼ引き継がれており、どこを・どのような手段で・どのように整備するかという基本的な方針を示したもので、細部は住民との協議により定めていくとした。ここで『一寺言問地区整備計画』(瓦版第13号参照)の内容について、防災まちづくり計画との加筆部分・詳細部分を紹介する。

< 2 > 防災まちづくりの目標

延焼遮断帯の整備：幹線道路沿道の建物の不燃化

地区環境の防災性能の向上：木造密集地区の改善、地域防災活動拠点や防災活動広場の整備、地区防災道路や緑道の整備、防災用水の整備

防災コミュニティの形成：住民自治能力の向上、地域防災活動拠点会議を中心とした防災活動の態勢づくり

< 3 > 計画の内容

幹線道路沿道の不燃化

魅力ある都市景観の形成

木造密集地区の改善（木造老朽建物の建て替えの促進、細街路の整備、行き止まり路地の解消、街路・街区単位の総合整備）

地域防災活動拠点の整備

防災活動広場の整備（一寺言問防災広場の整備、寺社などとの防災協定の締結、隅田川沿いの不燃化と公園などの整備）

地区防災道路の整備（一寺言問の道の整備、墨堤通りの歩道などの整備、地藏坂通りと三とも通りの道路改良）

緑道によるネットワーク（生け垣化などの推進、寺島のみちづくり、墨堤の桜再生）

防火用水の整備

防災まちづくり活動の推進

防災活動の態勢づくり

防災を中心とした内容になっているが、家屋の建て替えや道路整備などのハードの部分だけでなく、防災コミュニティの形成といったソフトの部分にも取り組むことを定めている。墨田区は一言会の活動に助成金を出すとともに会合に参加して活動を支援している。また専門家も必要に応じて一言会に助言や提案を行う。しかし依存するのではなく、区が提示した課題に一言会が意見を述べる、住民の意見を区に提案するなど、相互理解を深め住民の主体性を尊重することを心がけている。こうした住民と行政双方の計画作りを経て、一言会と墨田区が協働で防災まちづくりを進める姿勢が整い活動が展開していく。

[3 - 3] 一言会の活動

防災まちづくり計画のもと一言会は具体的な活動に着手していく。一言地区が防災まちづくりを始めるきっかけとなった『防災生活圏モデル事業』の期間は1985年から1992年までである。その後1993年から1996年までは『防災生活圏モデル促進事業』が適用される。これ以後も一言会の活動は続くが、1996年までを活動の一つの区切りと考えることができる。ここで瓦版を参考に、1996年までの一言会の活動を整理する。

まちづくり用地の取得 ポケットパークの形成（はとほつと、会古路地、向島有季園、地藏坂まちづくり用地、一寺言問集会所） 路地尊の設置
道路の整備（寺島のみち、旧墨堤之道、地藏坂通り、三とも通り） 塀の生け垣化
再開発計画への提案（向島百花園周辺、隅田川沿いのマンション・工場）
幹線道路沿道の不燃化
一寺小学校防災連絡会、言問小学校防災活動拠点会議の発足
他地域のまちづくりの視察、まちづくり団体との交流

この中から第3章で論じる向島地域におけるアート活動の下地となっていると筆者が考える活動について紹介する。

路地尊（1～6号機）の設置（1987～95年に設置）

路地尊とは隣家の屋根に降った雨水を地下の貯水槽に溜めて手押しポンプで汲み上げるという装置である。非常時には初期消火や濾過した上で飲料水に使い、平常時には路地や植木の散水に利用できる。大雨で下水から水があふれる都市水害の軽減にも役立つ。

路地尊という名前には、細い道の住民であることを認めそこに存在する下町の人情を尊重することで、被災時に大切な近所との助け合いを促進していこうという意味が込められている。路地尊は日常の清掃活動をする周辺の住民や、雨水を提供してくれる隣家の住民の協力により生かされている。3号機以降は区のまちづくり用地を活用したポケットパークに設置され、消火訓練も行われる。まちの良さである住民同士のつながりを防災に生かし、日常生活の中から促進していこうという一言会の想いが読み取れる。

向島有季園の形成（1989年に完成）

向島有季園とは「いつも季節の花や野菜の有る楽園を」という願いを込めて命名された防災小緑地であり、路地尊の雨水で有機栽培を行う。向島5丁目の約33坪の土地にはマ

ンションを作るという話があり問題視されていた。当時財政に余裕のあった一言会はその土地をまちづくり用地として買い取り、一言会と向島五丁目東町会は利用策を議論した。その結果災害時は非常用食料供給に役立ち、日常時は土いじりや農作物と触れ合える農園にすることが決まった。12区画に分けられた1坪農園で、2年に一度の抽選で選ばれた住民が1区画を割り当てられ各自で利用と管理を行う。利用者会議に加え、毎年春には植木の選定会、秋には地区住民を招いて花や野菜の収穫祭を行い、子供達も楽しみにしている。向島有季園での活動は現在も続いている。

向島有季園というポケットパークが設置されることで、家屋の密集を防ぐと同時に災害時には避難場所となり防災性を高める。さらに平常時は農園として利用できイベントも開催されるため、楽しめると同時に住民同士の交流を促進する場となる。

旧墨堤之道の整備（1990年に完成）

墨堤の桜は徳川吉宗が幕府の政策で植えたものだが名所になる以前は大分荒廃していた。その桜を市民が植え継ぎ管理することで名所となった。一言会は歴史を受け継ぎ市民参加で桜を復活させたいと考えた。住民の手で植樹を進めて桜並木を再生させ、同時に歩道や交差点の広場を拡げて歩行者空間として整備し沿道建築物の不燃化を進めることで、墨堤通りは広域避難広場（白髭東防災団地）へ続く安全な避難路になる。

防災まちづくり計画ではそのシンボルとして、かつての墨堤の名残を唯一とどめる道である旧墨堤之道を整備し、遊歩道にすることを定めた。そこで一言会は1987年から沿道の住民と計画についての協議を行った。参加者からは整備する必要がないという意見と、歩きやすい道に整備してほしいという意見の両方が出されたため、継続して協議を行うこととなった。沿道に住む13名の住民は9つの項目から成る要望書（歩道はレンガタイルにして美しい景観にする、歩道の高さを低くして歩きやすくするなど）を作成し一言会に提出した。一言会の理事会は要望書を尊重し、沿道住民と一緒に区に提案することを決めた。区の職員も交えた協議の結果1989年に整備計画がまとまり、住民の要望の多くが盛り込まれさらに掘り下げた内容となった。その後工事が行われて1990年に旧墨堤之道が完成する。一言会が整備を提案してから3年間、沿道住民や区の担当者との協議を重ねた結果である。時間がかかったものの、タイル張りで拡幅された歩道など住民の想いが反映されている。

歩道を拡幅し高さも低くすることで歩きやすい工夫がされており防災にも役立つ。また墨堤の名残や白髭神社の参道であるという特徴を生かし、歩道をレンガタイル張りにする、ガードレールを撤去する代わりに車止めのボラードを設ける、ガス灯風の照明を設置するなど、風情を感じられる景観上の工夫も多い。入口には墨堤の桜再生のシンボルという意味を込めて桜が植えられている。旧墨堤之道は防災性能を高めるためにただ道の整備をしたのではなく、住民の想いを反映して、江戸時代から続く墨堤の文化や周囲の景観と調和した、住民が親しみを感じ愛される道になっている。

一寺小学校防災情報連絡会（1990年）、言問小学校防災活動拠点会議の発足（1991年）

一言会の呼び掛けにより発足した、学校を中心に町会・PTA・消防団・商店会・防災関係機関（墨田区も含む）が集まり、災害時の応急活動の態勢づくりを話し合う組織である。一言会に属していない町会も含まれている。年に数回活動を行い、情報交換や意見交換を行うこととしている。現在も活動は続いており、災害時には各小学校が避難場所となり、飲料水・食料・情報を配布するなど中心となって対応を行う。一言会と連携しており、災害時には欠かせない応急活動、それをスムーズに行えるようにするための平常時から準備を行う役割を担う。

一寺言問集会所の形成（1996年に完成）

一言会が防災まちづくり計画の中で防災広場として区に買収を要望していた高田製薬跡地（東向島1丁目、約300坪）を東急不動産が取得し、マンション建設の計画を明らかにした。これに対して一言会は木造密集地にあるこの土地を道路整備用地、並びに防災広場用地として計画していたことを説明し、東急不動産にまちづくりへの協力と区への土地売却の検討を要望した。しかし土地は事業用地として買ったので区に売る意向はないという同社の方針は変わらなかったため、一言会では方針を転換し少しでも防災まちづくり計画の方針に近いものに関係計画を改善していく方向で同社に要望することになった。協議は東向島一丁目中町会と東向島一南町会とわいわい会が担当になり計3回行い、10の要望項目を提出した。その中で同社は方針を転換し、マンション計画を辞めて区に土地を売却することに決めた。一言会は周辺住民とも相談しながら担当理事会でワークショップを行い、建築物を含んだ広場をつくることが決定した。みんなの家 というコンセプトのもと、一言会による防災まちづくりの活動拠点として位置づけること、管理は一言会に委託し住民主体で活用できる施設にすることが決定された。そして1996年に防災まちづくり広場と一寺言問集会所が完成し、路地尊も設置された。防災まちづくり計画の実現に向けて空き地を上手く活用し、一言会と墨田区が協働して完成させた活動である。

[2 - 4] 一言会による防災まちづくり活動がもたらしたもの

1996年に防災生活圏モデル促進事業が終了することで一言会の活動は一つの区切りを迎える。それと同時に1990年代後半は第3章で論じるアート活動が展開され始める時期でもある。詳細は後述するが、一言会による防災まちづくりにアート活動が直接関わっているわけではない。しかし序章の仮説で述べたように、もともとアート活動が全くと言っていいほど存在しなかった一言地区や向島地域でアート活動が展開されるようになった背景には、1980年代後半から住民主体で熱心に進められてきた一言地区の防災まちづくりが下地となっているのではと筆者は考えている。そこで[2 - 4]では防災生活圏モデ

ル促進事業の終了時において一言会による防災まちづくりが何をもたらしたかについて整理する。

まちへの関心の高まり

一言地区は木造住宅や細い路地を抱える木造住宅密集地域であるため、防災上の課題を多く抱えていた。そこで瓦版に掲載されている「地元のことは地元の人しか分からない」という声にもあるように、住民が主体となって防災まちづくりに取り組む組織としてわいわい会を前身とした一言会が結成された。一言会の誕生により住民が抱える地域の問題を共有する場と、その問題を行政に報告する機会が生まれる。住民個人ではなかなか動いてもらえないところだが、一言会を通して行政に報告することで改善につなげられるという強みがある。一言会が1991年に行ったアンケート（瓦版第23号参照）によると、一言会の活動が役に立っていると答えた住民は62%に上り期待が大きい。活動に参加・協力したいと答えた住民は64%に上り、自らが住む地域社会に積極的に関与し、自分の頭で生活のデザインを描こうと考える人が増えている。

また複数の課題を一度に解決するのは不可能であり、新たな課題が出てくることも多々ある。できることから少しずつ進める修復型のまちづくりというスタンスをとり、防災まちづくりの先進事例として全国から注目を集めてきたことも関係して、現在まで活動は持続している。その過程では一言会を中心としてまちづくりに関わる人のネットワークが構築され、地区外部との視察や交流も盛んになった。

地区の防災性の向上

1980年代後半の一言地区では第1章で整理したような複数の課題を抱えていたが、特に深刻な防災上の課題を抱えていて防災生活圈モデル事業に指定されたため、防災を中心としたまちづくりが展開する。[2-3]で紹介したように防災まちづくり計画のもと複数の活動が行われた。墨田区全域で行われた細街路拡幅整備事業の中で、一言地区では73件の住民の協力で延長898mの細街路が拡幅され、全区の一割近くに及ぶ成果を挙げた。また一言地区では1986年頃の耐火建築と簡易耐火建築を合わせた不燃化率は23%だったが、1996年には30%にまで向上した。何を基準として防災性を判断するかは難しいが、上記のデータや活動内容からは対策が急務であった路地の整備・用地の確保といったハードの部分において成果を挙げたと捉えることができる。

下町の良さを反映させる工夫

またそれらのハードの部分に関しても防災性を高めると同時に、一言会が中心となって住民の想いも反映させることで、まちの景観・歴史・文化を取り入れたプラスアルファの工夫がなされている。特に昔から続く下町の良さとしての近所とのつながりやまちの特色を生かした防災まちづくりを進めようとしている点に特徴がある。路地尊や向島有季園は

住民同士の交流を促進させる工夫をすることで、そのようなまちの良さを防災にも生かそうとする考えが読み取れる。旧墨堤之道は江戸時代から続く墨堤の文化や周辺の環境と調和した工夫が施されることで、大切にされてきた歴史や風情を感じることができ、住民に愛される内容になっている。

これらの活動からは昔から続く近所とのつながり・路地・墨堤の文化・向島百花園や路地園芸がもたらすおいしいなどのまちの特色を住民が大切にしており、それらを生かしたまちづくりを行おうとしていることが分かる。

ハードの部分を中心とした活動の限界

一言会の活動は防災性を高めると同時にプラスアルファの工夫がなされることで大きな成果を挙げた。しかしハードの部分を中心とした活動は多額の費用や時間を要する。一言会の活動は行政からの助成に支えられていた部分が大きい。防災生活圈モデル促進事業が終了することで、同事業からの予算は終了する。1996年以降は瓦版の発行頻度が減っているという事実があり、予算の問題が関わっていると思われる。不燃化・緑化・細街路の拡幅などには墨田区の助成金を申請でき、また後の2007年には『墨田区まちづくり条例』の認定団体として助成を受けられるが、財政的な制約は付き物である。一度に複数の事業を行ったり、希望する全ての事業を行うことは難しい。

ハードの部分の活動の中でも特に個人の権利関係の調整を伴う事業は難しい問題である。民有地における空き家が目立っており、原因は建物の老朽化・高齢化による建て替え能力の欠如・複雑な権利関係など密集市街地固有のものが多い。空き家は災害時に倒壊の恐れがあり、放火の標的にもなりやすいことから、近隣住民は不安を抱えている。一方でこのような個人の権利関係の調整を伴う事業は高度な専門知識を必要とするため、住民だけで解決するには限界があり、行政や不動産会社や専門家の協力が欠かせない。また終わりのない問題でもあるため継続して取り組む必要がある。以上のようにハードの部分の問題を解決するには時間がかかり、全てを解決するには限界があることが分かる。

ソフトの部分の対策の必要性

第1章で紹介したデータからも分かるように、人口の面では1990年代の後半において一言地区の総人口が減少する中、65歳以上の高齢者の人口は年々増加し高齢化が進んでいる。産業の面では小規模の事業所を中心に地区内の事業所数が減少しており、職住一体となったライフスタイルに変化が生じると想定できる。これらの問題は先ほど述べた木造老朽家屋の建て替えなど、ハードの部分の問題の解決にも悪影響を与える。高齢化・地区内産業の衰退・家屋の老朽化といったインナーエリアが抱える問題が下町文化の衰退をもたらすことは序章で述べた。これによりソフトの部分として防災まちづくりにも生かそうとしていた近所とのつながりやまちの活気といった下町の良さが失われる恐れがあった。

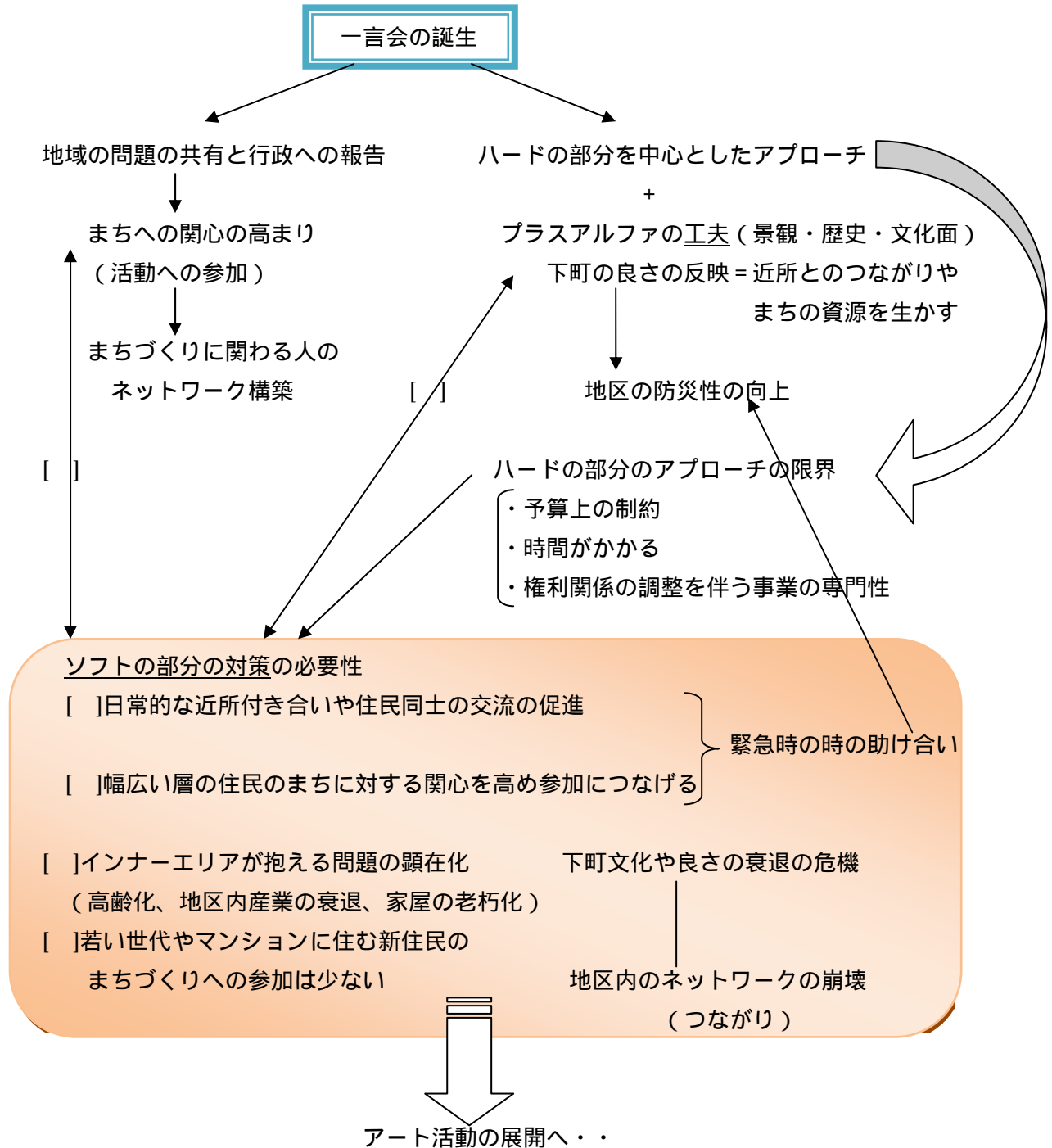
さらにA氏へのインタビューを通して、一言会のメンバーや地域活動に参加する人は若

い人が少ないという問題を発足当初から抱えていることが分かった。原因は自分の仕事が忙しく地域の活動に参加する余裕がないことや、そもそも地域への関心が薄いことが挙げられる。地元で働く人は付き合いや地域で交流を深める必要性から地域活動に参加することが多いが、事業所数の減少からも分かるように一言地区でもサラリーマンとして地域外で働く人が増加している。また A 氏によると地域活動に参加する人は、地域への居住歴の長い人が多く、マンション居住者など居住歴の浅い人の参加は少ない傾向にあるようだ。1995年に発行された瓦版の第38号には、「資金を集めることも必要だけど新しい仲間も必要じゃないか」という記述があるように、幅広い層の住民のまちに対する関心を高める必要性を抱えていたといえる。

様々な問題が複雑に絡み合った木造住宅密集地域における防災まちづくりには、ハードの部分の整備や改良に加え、いざという時に助け合えるようにするための日常的な近所付き合いや住民同士の交流の促進、また幅広い層の住民がまちへの関心を高め行動を起こすことを促進するようなソフトの部分の対策を模索していたと考えられる。

一言会による防災まちづくり活動がもたらしたものは以上であり、これらの項目が下地となってアート活動が展開されたと筆者は考える。各項目を図 2-1 で整理した後、第 3 章に移る。

図 2-1 一言会による防災まちづくり活動がもたらしたもの（筆者作成）



第3章 防災まちづくりとアート活動の関係性

第2章では1980年代後半からの一言会による防災まちづくり活動を整理した。図2-1からは防災まちづくりにはハードの部分の防災性を高める活動にも、日常的な住民同士の交流や幅広い年齢が地域に関心を持ち行動を起こすことを促進するようなソフトの部分²が組み込まれていたことが分かる。これらが下地となり、さらにハードの部分の活動の限界やインナーエリアが抱える問題が露呈したことで、ソフトの部分の対策の必要性が明らかになる。このような背景のもと1990年代後半から一言地区を含む向島地域においてアート活動が展開する。

そこで第3章では防災まちづくりとアート活動の関係性について整理する。始めに[3-1]では「まちなかアート」に至るまでのアート界の流れと一般的な特徴について文献を参考に紹介する。これは向島地域のアート活動が現在まで継続している理由の一つに、近年全国の至る所で行われているまちなかアートがメディアなどにより紹介されることで、人々の認知度や理解が高まったことが関係しているからである。まちなかアートの一般的な特徴を紹介することは、後に向島地域のアート活動の特徴や役割を論じる上で役立つ。

[3-2]では文献・先行研究・向島地域にある現代美術制作所のB氏へのインタビューを参考にアート活動の展開を整理する。これにより一言地区が抱えていたソフトの部分の対策の必要性をどのようにアート活動が受け継いでいったのかを明らかにする。

[3-3]では第2章の防災まちづくりをどのようにアート活動が受け継いだのかについて、[3-1]と[3-2]を参考に改めて整理する。

[3-1]「まちなかアート」の誕生

「まちなかアート」に至るまでのアート界の流れと一般的な特徴について文献を参考に紹介する。

(1) アートの始まりは「不動産美術」

美術そのものの始まりはるか昔にさかのぼり、旧石器時代の洞窟壁画が出発点とされる。文明発祥以前の先史美術といわれるものは、洞窟などの岩肌に直接描いたり刻印をした絵画やレリーフが主流を占めていた。同時代には石や骨を彫ったポータブルサイズの彫刻がつくられ、「動産美術」と総称されていることから、洞窟壁画のような土地に密着した絵画のことを「不動産美術」(荻原、2001、pp.9)ということができる。それ以後の美術史をたどると、エジプトやメソポタミアの古代美術から、ギリシア彫刻、ポンペイの壁画、

2 「社会とアートのえんむすび」、森司、2001

「企業の社会貢献と現代アートのまちづくり」、三浦典子、2010

「現代アート入門の入門」、山口裕美、2002

を参考にする。

中世の教会を飾るモザイク画、ルネサンスの宮廷を彩るフレスコ画まで、全て建造物に密着した移動不可能な美術品と捉えると、不動産美術に括ることができる。これらの時代にも動産美術は存在したが、主流は不動産美術である。不動産美術は建造物と一体化しているため、多くの人目に触れることを意図してつくられており、墳墓や王宮内部の装飾を例外として、概ね公共的な性格を備えていた。

(2)「美術館」でのアートへ

ところがルネサンス期に油彩画の技法が登場したことで大きな変化が起こる。油絵はそれまで壁に直接描いていた絵を木の板（後によりポータブルな布）に描けるようにし、持ち運びを可能にした。この技法は西洋全域に広がり、以後のアートの主流を不動産から動産、つまり絵画や彫刻を建造物から切り離し、一つの作品として自立させるきっかけとなった。この流れはアートが商品として流通する道を開き、作品の私有化を促したため、やがて美術館の基礎となるプライベートコレクションが形成される。作品の私有化がもっとも早かったのは17世紀のオランダである。オランダでは一足先にプロテスタントによる市民社会が実現したため、裕福な市民層が商品としての絵画を買い支え、美術市場が活気づいた。これが一般化するのにはフランス革命を経て市民社会が到来する19世紀である。この時期にアートは近代を迎え、また美術館成立の時代とも重なる。

美術館とはアート作品を保存・展示する場所だが、同時にそれを一般公開するというのが大原則である。理由はアート作品のもつ芸術性が公共的価値を有しているからである。そのため絶対王政が倒れ市民社会が到来した19世紀には、一部の権力者に独占されていた美術コレクションは一般市民に公開される必要があった。このような背景のもと、美術館が各地に誕生していく。20世紀に入るとすでに評価の定まった古典的作品ではなく、同時代のアートをコレクションの対象とする近代美術館が生まれる。近代美術館ではコレクションの常設展示だけでなく、あるテーマのもとに作品を集めて並べる企画展示も始まる。そこでどのような作品にも対応できる展示空間が求められ、真白な壁のホワイトキューブを理想とするようになった。このように美術館が理想的な展示空間を目指す流れとともに、作品は美術館に展示されることを前提に、あるいはそれを目標に製作されるようになる。この結果美術館は公共施設であり作品を一般市民に公開することを目指したにも関わらず、美術館そのものが内側のアートを外側の社会から遮断する額縁のような役割を負ってしまった。

(3)「脱美術館化」するアート

上記のような矛盾を抱え込んだ美術館に対する異議申し立てとして、1960年代からは美術館に閉じ込められたアートの脱美術館化を図り（荻原、2001、pp.14）もう一度公共空間に取り戻そうという「パブリックアート」の動きが出てきた。パブリックアートと

は駅前彫刻など、都市の公共空間や建築空間に設置されている作品を表す。パブリックアートは土地や建物に付随するため、空間との整合性、恒久設置に耐え得る耐久性や安全性を考慮する必要がある。

その傍らで同じく1960年代からは屋外で活動を行うアーティストが増加する。例えば大地を相手に壮大なランドアートを手掛ける者、路上や無人のビルでゲリラ的にパフォーマンスを行う者、病院や駅などの公共スペースを借りて合法的に展覧会を行う者、オルタナティブスペースを立ち上げてアート活動の拠点を自主的に運営する者など、別の回路から表現の可能性を見出そうとする動きが出てきた。

これら1960年代のアートは、ある特定の場所のために行われているものが多い。ある意味で不動産美術への回帰ともいえるが、それは一つの側面にすぎず、かつての不動産美術とは異なる。1960年代のアート活動はアートに社会性や公共性を回復させる手段として、アーティスト主導で進められている。またランドアートやパフォーマンスは「アート作品」ではなく、「アートプロジェクト」という言葉が用いられることが多い。「プロジェクト」という言葉には「計画」「事業」という意味があり、計画の立案から実現までのプロセスを含んだ概念である。そのため作品や展覧会がプロジェクトなのではなく、プロジェクトの結果が作品や展覧会に結実するというべきである。1960年代のアートの大きな特徴はこの点にある。つまり企画立案・地権者との交渉・環境調査・資金集め・実施作業と言った作品の実現に至るプロセス全体をプロジェクトと呼び、広義の作品として位置づけていることである。

(4)「まちなかアート」の誕生へ

(3)の流れを受け1990年代からは従来の枠組みから解き放たれたアートが、社会の様々な場面や領域で新たな局面を作り出す動きが目立ち始める。1960年代のパブリックアートなどが示す特定の場所のために行われるという面を発展させ、1990年代以降のアートの共通点はまちへ出るアートへ変貌していることである。ここで「まちなかアート」の特徴を整理する。

場所が関わるアート

アーティストはまちづくりのために活動を行う訳ではなく、活動の動機や目標は人それぞれである。例えばパブリックな空間でアートを見せたいとの考えからスタートしたもの、社会や場への関心を原点としアートと社会との関係を問い直そうとしたもの、アートやアーティストが関わることで住民とのコミュニケーションのきっかけを作りまちづくりの在り方を変えたいと考えるものなどである。しかし様ではない中でも、まちへ出てアート活動を行うからこそ、その地域で活動を行う意味を考え、その意味を作品に反映させることを大切にしている傾向がある。こうすることで作品に対する住民の共感も得やすくなり、協力を求められるというメリットもある。そのために特徴の一つが「場所が関わるアート」

といえる。

プロセス重視のアート

(3)では作品の実現に至るプロセス全体をプロジェクトと呼び広義の作品として位置づけると記述したが、作品制作に至るプロセスを重視していることが特徴として挙げられる。アートを左右しているのは、アートそのものの魅力というよりは、活動の動機への共感や、人の気持ちを動かす何かを秘めているかどうかである。プロセスの中には があるその場所で活動を行う意味を反映させる必要がある。

共同作業によるアート

「共同作業」とは のプロセスに含まれる手段にあたる。従来までの絵画や彫刻などの作品はアーティストによってつくられ、作品から鑑賞者へと情報が一方通行的に流れるものであった。しかし「まちなかアート」は、アーティストが一方的に制作して作品を完結させるのではなく、立場の異なる人々や市民などの鑑賞者自身が参加・体験するという共同作業により成り立っている。共同作業の形態はワークショップやボランティアなど様々であり、その形態についてもアーティストと参加者自身が選択することになる。共同作業の条件として、活動が誰にでも開かれていること、多様な参加機会があること、情報が公開されていることが必要になる。参加者の主体的な関わりが増すほど当初想定していた内容から変化していくこともあり、誰のものでもない皆の作品になっていく。そこでの目的は芸術性の追求よりはむしろ、まちづくりやコミュニティの強化などの、民主的で公共的な価値の創出に主眼が置かれることが多い。社会に対して何かを仕掛けるにはアーティスト一人では難しく、協働する仲間(参加者)の存在が不可欠である。

つながりを築くアート

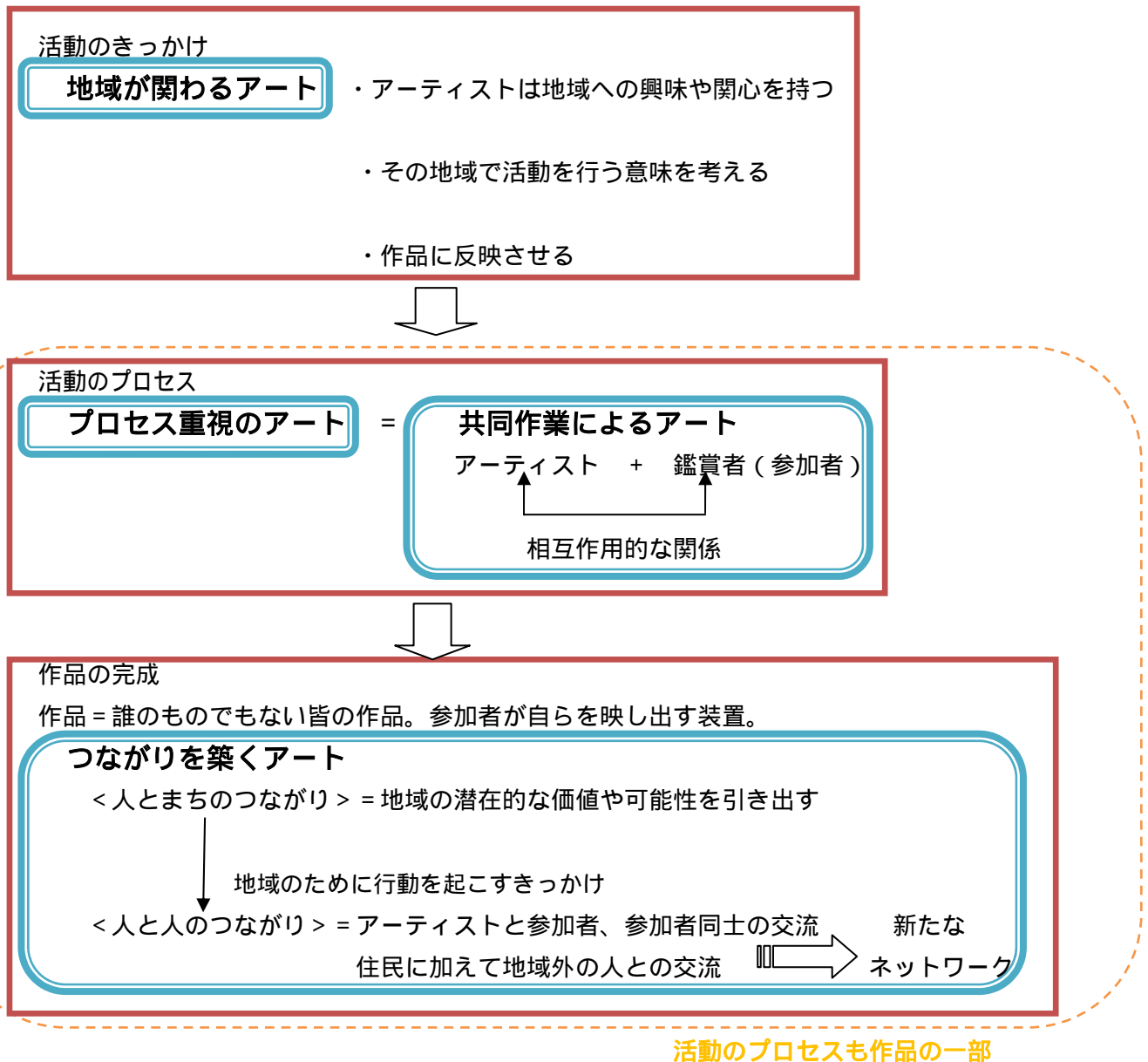
以上のような共同作業というプロセスを経ることで、作品はアーティストだけでなく参加者が思いを投げ出し、自らを映し出す装置となる。参加者の立場によって興味・関心・解釈は異なるため多様性が保障され、作品と参加者は相互作用的な関係にある。アートという新たな視点でまちに関わることで、その場所が持つ潜在的な価値や可能性を引き出す。そして場所への気づきや関心が増し、地域のために行動を起こすきっかけとなり得る。このようにアートは<人とまちのつながり>を築く。

また で述べた共同作業や、アートが地域のために行動を起こす媒介として機能することで、アーティストと参加者、また参加者同士が相互にコミュニケーションを深められる。さらにアートには発信力があるため、地域内外を問わず、新たな交流やネットワークを生む可能性がある。このようにアートは<人と人のつながり>を築く。

アートが<人とまちのつながり>や<人と人のつながり>の構築に貢献することで、まちづくりに必要な地域への関心や市民意識、住民同士のコミュニケーションを醸成するきっかけになり得る。

以上までのアート活動の特徴を図 3-1 にて表す。

図 3-1 「まちなかアート」(1990年代以降)の特徴 (筆者作成)



[3 - 2] 向島地域におけるアート活動の展開

文献・先行研究・向島地域にある現代美術製作所の B 氏へのインタビューを参考に、向島地域におけるアート活動の展開を整理する。

図 2-1 から分かるが、一言地区の防災まちづくり活動には、景観・歴史・文化面の工夫や下町の良さの反映といったソフトの部分が組み込まれていた。一方で 1990 年代後半に

は財政面や事業の専門性から生じるハードの部分のアプローチの限界、インナーエリアが抱える問題の顕在化、まちづくりの担い手の偏りといった問題が明らかになり、ソフトの部分の対策を模索していた。一言会のまちづくりに協力してきた都市計画や建築の専門家達の側でも、ハードを中心としたまちづくりの限界を感じ、新たなアプローチを求めていた。同時期に近隣の京島地域でも京島まちづくり協議会と住民が連携して住宅の建替え事業などを中心とした防災まちづくり活動を行っていたが、一言地区と同様に活動は一つの区切りを迎えていた。こうしてまちづくりのコンセプトの重心がハードからソフトへの移りつつあった時、何段階かのプロセスを経た結果としてまちなかアートの持つ可能性が認知され始める。このプロセスには向島地域で展開される幾つかのイベント、そして現代美術製作所と向島学会という組織が関わっている。そのため各イベントと組織を整理することでアート活動の展開を追う。

(1) 1998年 向島国際デザインワークショップ

向島地域には1988年に発足した“川の手倶楽部”という組織が存在する。住民や町会役員以外にも行政・都市計画の専門家・再開発を進める民間企業など幅広いメンバーから構成される。バブル経済による建築ラッシュを迎え変貌しつつある向島の将来像とまちづくりの進め方について、住民・行政・企業・専門家が一緒に話し合うことを目的に発足した。「粋な墨堤界限」という目標を定め、その中に「下町の粋の文化を受け継ぎながら新しい文化の創造に挑戦する」という内容があるように、防災ではなく文化というアプローチのもと活動を行っていた。

川の手倶楽部はドイツのオッテンゼン地区で活動するNPO団体との交流を行っていた。これはオッテンゼンの映画監督が向島を舞台に映画を製作し、その際に川の手倶楽部の専門家と交流が始まったことがきっかけである。向島と同様に町工場を抱えドイツの下町であるオッテンゼンは、まちが廃れて犯罪が増える時期があった。そこにアーティストが入りアトリエやギャラリーを作ることでまちを再生した。川の手倶楽部の専門家はこの事例を見学しており、まちづくりのアプローチとしてアートを利用する考えがあった。

川の手倶楽部・一言会・京島まちづくり協議会は一部のメンバーが重複していることもあり交流があった。そこで新たなまちづくりを模索する一言会・京島まちづくり協議会と、文化面の活動を行っていてアートというアプローチが念頭にあった川の手倶楽部が連携し、1998年に「向島国際デザインワークショップ」を開催した。

二週間に及ぶワークショップには10か国から建築系の学生を中心とした150人以上の参加者が集まった。世界に共通する都市部周辺の市街地が抱える様々な課題について、

向島を事例にあらゆる視点からまちづくりの新しい方向性を探るという目的のもと、発表と議論が行われた。主な対象地区は一言地区と京島地域で、目の前に広がるまちを見据えどのようなポテンシャルを発見できるかという難題に挑戦した。都市計画的な視点では木造住宅密集地域や路地は改変されるべき場所としてネガティブに扱われる存在である。しかしワークショップではそうした向島地域の特色が、住み手への優しさに溢れコミュニティ発展の豊かな可能性を秘めているという視点から、ポジティブに捉え直す試みが多く見られた。また地域外から参加した多くの建築家や専門家が向島に関心を持ち始めた。

(2) 2000年 向島ネットワークイベント

同イベントはドイツ人建築家のティトス・スプリー氏が地元有志の協力を得ながら立ち上げたアートイベントである。大学での研究がきっかけで向島地域に興味を持ったティトス氏は、国際デザインワークショップでアーティストやデザイナーや建築家を集めるなど重要な役割を果たした。同イベントではアーティストや10数カ国からの留学生が、一言地区と京島地域の空き家・空き地・路地・商店街・まちづくり事業用地などを利用し、作品を現場制作した。このイベントにより向島のまちづくりに初めてアートのコンセプトが入ってきた。

空き地にある花壇にハーブの葉を植え住民にハーブティーを提供することで井戸端会議の復活を試みる・誰も入れないまちづくり用地の中に児童用の遊具を設置し遊休地の存在の意味を問いかける・長屋で写真展を開催し古い建物の魅力を引き出す、などの作品が制作された。

従来まではネガティブにしか考えられていなかったり住民が意識していなかった地域の特色が、アートというアプローチを通して、ポジティブな一面を発見したり住民の目を向けるきっかけになった。イベントを通してアートの持つ可能性が地域の中で初めて認識された。

(3) 2000年 向島博覧会2000

向島ネットワークイベントがきっかけとなり、引き続き地域の特色を生かしたイベントが続く。向島博覧会の実行委員会には発案者の川の手倶楽部に加え、一言会と京島まちづくり協議会を始めとした各種まちづくり団体も含まれており、町会や組織など旧来の壁を越え向島地域全体で取り組んだ初めてのイベントである。密集市街地の総合的な再生のため、まちづくりの契機を同時多発的に生み出し、新たなネットワークを広げることが目的とされた。参加者としてオッテンゼンのアーティスト・全国のまちづくり関係者・まちなかアートに関心のある人が集まった。さらに地区内外から36,000人もの観客が訪れた。

博覧会は空き地・空き家・路地などまち全体を会場とし、10日間で50の企画が行われた。まちなかアートの特徴を用いたアート展や社会実験は、地域の人材・産業・文化・空き地や空き家などの遊休資源の可能性に光を当て、その活用を考える契機となった。防災・防

犯・高齢化・子育て・アート・ビジネスなどの様々なテーマについて、住民・行政・専門家が垣根を超えて話し合い考えることで、自助と共助による総合的な地域再生の道筋を探る契機となった。博覧会で使用した空き家や空き工場には、アーティストや学生たちが住み始めアトリエやスタジオとして利用する例も出始める。

(4) 2001年 アートロジィ 向島博覧会2001

向島博覧会後に向島に住み始めたアーティスト達が、地元有志の協力を得てアートロジィを開催した。主な展示会場にアーティストの自宅や路地奥の戦前長屋をそのまま用いており、観客はそれを探し歩くという趣向である。展覧会であるとともに自宅訪問でもあるというユニークな形式は、下町の路地を巡り歩いて会場に辿り着くというまち歩き楽しさや、新たな形での地域再生ということから数多くメディアに取り上げられ、9日間で約7,000人の観客を動員した。その半数以上は地域の住民であったが、向島の外部からの訪問者も多かった。

アートロジィ開催後には年々地域におけるアート活動が盛んになっていく。向島で活動するアーティストが仲間を呼ぶことで、向島に関心を持ち活動を行う人が増えていったり、時にはアーティストの活動に影響を受けた住民が活動に興味を持ち関わり始めることもある。

(5) 1997年 現代美術製作所の設立

このようなアート活動の盛り上がりには、1997年に設立された“現代美術製作所”という現代アートのためのプロジェクトスペースと、それを運営するB氏の役割が大きい。現代美術製作所は工場であった場所だが、工場の3代目であり大学で美術史を専攻していたB氏がプロジェクトスペースに変更した。アート活動が向島で展開し始める2000年頃まではB氏はイベント時にスペースを提供するなどしていたが、アートロジィによる地域の盛り上がりや人を惹きつけるアートの力に驚いた。一方でイベントに関わったアーティストからは、運営中での住民との些細なトラブルや、主催と実行役を両方担うことの大変さから、次回のイベント開催を嫌がる声も挙がった。せっかくのアートの盛り上がりが終わってしまうことの危惧から、B氏は現代美術製作所を運営する立場を生かし、アーティスト達のまとめ役を担い始める。その後のアートイベントでの作品を通してアートがまちに与える影響や役割を実感したB氏は向島学会に所属し、アーティストと既存のまちづくり団体、アーティストと地域をつなぐ役割を担っていく。

(6) 2002年 向島学会の設立

上記のイベントを通してアート活動が向島地域で展開するが、その過程ではアーティスト・専門家・学生など、向島に関心を持ち各活動への参加や研究を行う人が増加したり、また実際に住み始める人も出てきた。そこで深化・多様化してきた個人のネットワークを

維持発展させるため、向島博覧会の実行委員会を母体として既存のまちづくり団体のメンバー主導のもと、新たにメンバーを加え“向島学会”(2006年にNPO法人格を取得)が設立された。メンバーは地元有志だけでなく防災まちづくり関係者・外部の建築家・アート関係者なども参加し、会員以外の人間も参加できるシンポジウムを開催するなど、地域外にも開かれた活動を行う。多様なメンバー構成であるため、防災まちづくりやアート活動など各種の地域活動に関わる人が意見交換をしたり、連携してイベントを開催することができる。このように向島学会はまちづくり団体同士や、向島に関心を持つ地域内外の人のネットワーク構築に貢献しており、向島地域のまちづくりのプラットフォームといえる役割を果たす。

[3-3] 防災まちづくりとアート活動の関係性

(1) 防災まちづくりの流れを受け継いだアート活動

1996年の防災生活圈モデル促進事業終了時の防災まちづくりは、ハードの部分を中心とした活動により地区の防災性を高めた。さらに住民から構成される一言会が中心となることで、それらの活動には景観・歴史・文化面の工夫が組み込まれていたり、下町の良さを生かしてまちづくりを促進させることを目指した。これらが下地となり、さらにハードの部分の活動の限界・インナーエリアが抱える問題・まちづくりの担い手の偏りが露呈したことで、防災まちづくりのソフトの部分としての新たなアプローチを探る必要性が生じていた。この点は同時期に防災まちづくりを進めていた京島地域においても同様である。

向島地域には文化というアプローチからまちづくりを行う川の手倶楽部が存在した。川の手倶楽部はドイツの下町であるオッテンゼン地区との交流の中で、アートを取り入れることで地域を再生した事例を知り、アートの持つ可能性を感じていた。そこで向島地域にもアートを取り入れようと考えた。一言会・京島まちづくり協議会・川の手倶楽部はメンバーが一部重複することもありかねてから交流があった。このようにして川の手倶楽部が中心となり、1998年の向島国際デザインワークショップを始めとしたイベントを開催することで、アート活動が展開していく。

[3-1]で紹介したまちなかアートの一般的な特徴とも照らし合わせながら各イベントの詳細に目を向けると、アート活動が大きく分けて2点を目指していたと考えられる。1点目は地域への関心を引き起こすことである。アート活動を行うアーティストや専門家は地域外で生活する人も多い。しかし向島地域で活動を行う意味を考え、人付き合いの良さなどの地域の特色や遊休資源を生かした作品を制作する。制作過程では参加者との共同作業が含まれることもある。これによりまちをポジティブな見方で捉え直すことやまちへの気付きを得ることができ、幅広い層の地域への関心や行動を引き起こすことにつながる。

2点目はつながりを構築することである。アート活動が盛り上がりを見せることで、地域

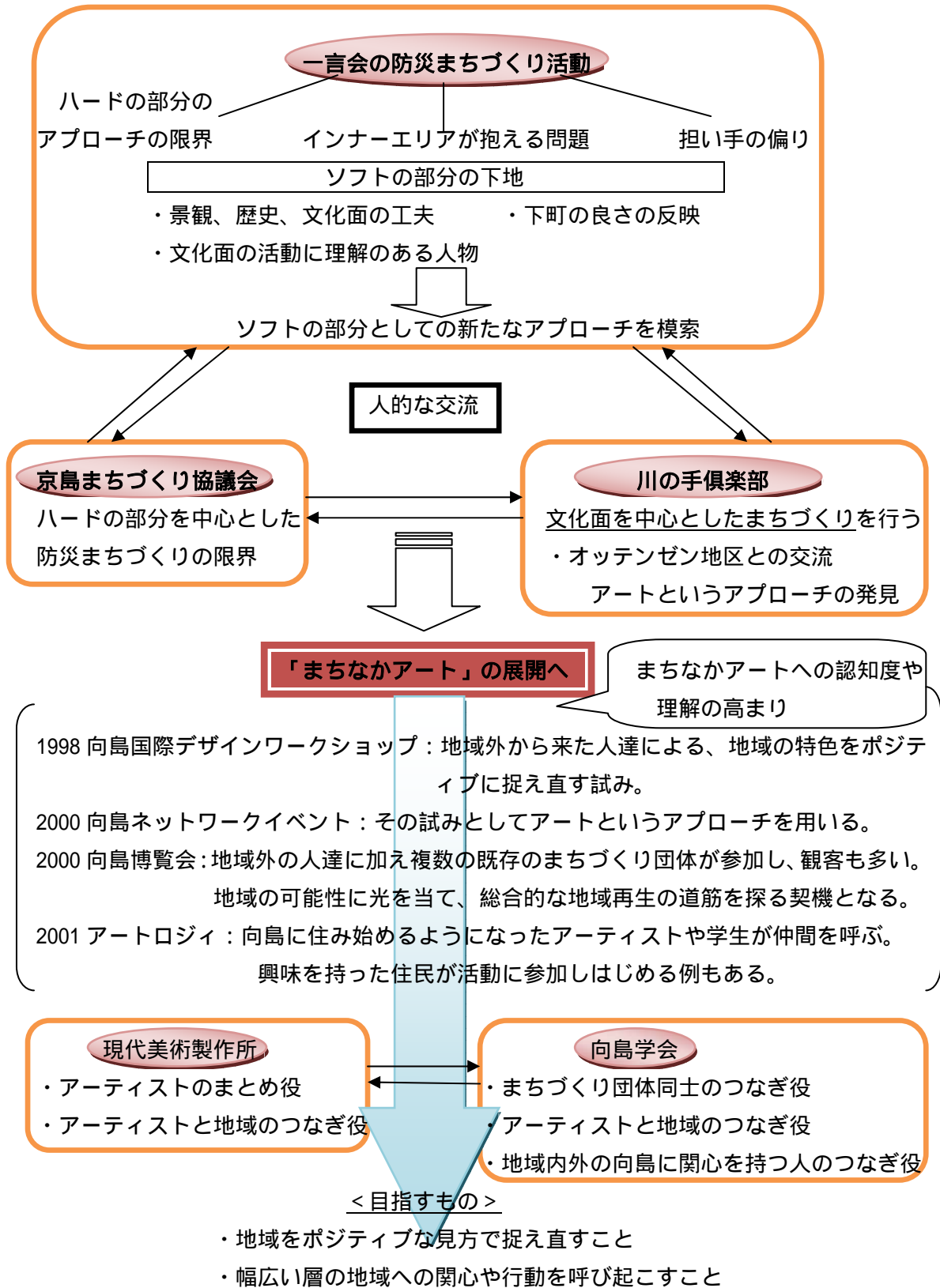
に住み始めるアーティストや学生が出始めその人達が新たに仲間を呼びよせる・活動に興味を持った住民が参加し始める、といった人と人のつながりを構築する可能性がある。これはまちづくりの契機を生み出し、新たなネットワークを広げる可能性も秘める。これらの2点は一言会の防災まちづくりが抱えていた問題にも当てはまる。

また1997年に設立された現代美術制作所はアーティスト達のまとめ役や、アーティストと既存のまちづくり団体・アーティストと地域をつなぐ役割を担う。2002年に設立された向島学会はまちづくり団体同士や、向島に関心を持つ地域内外の人のネットワーク構築に貢献している。このようにしてアート活動が地域に展開され、まちに根付くための基盤が出来ていく。

アート活動の展開には以上のような向島地域の事情に加え、[3 - 1]で紹介した一般的なアート界の動きも影響を与えている。近年全国の至る所で行われているまちなかアートがメディアなどにより紹介されることで人々の認知度や理解が高まり、アート活動を行いやすくなったということがある。

以上までで整理した内容を分かりやすく紹介するため、以下の図 3-2 を作成した。

図 3-2 防災まちづくりとアート活動の関係性 (筆者作成)



・つながりを構築すること

(2) アートが地域に根付く難しさ

(1)までに整理した内容からは防災まちづくりの流れを受け継いでアート活動が展開したこともあり、アート活動と一言会による防災まちづくり活動は現在に至るまで大いに連携しており、アート活動は住民の日常生活に密着しているという印象を抱く。しかし一言会のA氏へのインタビューを通して、一言会の日常的な活動にアートは関係していないことと、住民の日常生活にアートは深く関わっていないことを知った。

一言会の活動にアートが関係していない理由は活動の視点が異なっていることがある。例として空き家への対処の仕方を挙げる。一言会は防災性を高めることを追求するため、耐震工事や危険物の撤去などを行う。老朽した空き家は倒壊の恐れもあり近隣住民にも危険が及ぶ。筆者が参加した一言会の理事会会議からも感じた点であるが、一言会の活動ではこのような命に関わる深刻な問題を扱っている。一方でアーティストは空き家に対し、アートという視点によりそこで暮らす楽しさや面白さ、新たな活用方法を提案する。これは新たな見方を提供することで地域資源を生かす可能性を秘める一方、防災性を高めることには直接は結び付かない。そのため一言会の活動にアートが入ることは難しいといえる。

住民の日常生活にアートが関わっていない理由としては、生活の場としての要素が強い一言地区ならではの問題がある。非日常の縁日のような要素としてはアートは楽しくて面白い。しかし一言地区は空間的にも時間的にも生活の場という意味合いが強いため、アートが住民の生活の波長と合い考えを共有するには多くのハードルがある。住民が家の近くで騒ぎたてられることを嫌がったり、説明を省き感性や感覚に訴えるようなアートが敬遠されたり理解されにくいという事情もある。そのため現在ではアートが住民の日常生活に欠かせないものになる段階からは遠いといえる。

以上のようにアート活動が防災まちづくりに直接関わるのは難しく、また住民の生活の波長と合い考えを共有するには多くのハードルがある。しかし図3-2からはアートというアプローチが期待され、目指すものを抱えていたことが分かる。それでは地域におけるアート活動の役割はどのような点にあるかについて、第4章で提言する。

第4章 一言問地区におけるまちなかアートの役割

第4章では当論文の研究目的でもある一言地区におけるアート活動の役割について提言する。第3章までで整理したように一言地区では防災まちづくりの流れを受け継ぎ、新たなアプローチとしての期待を背負いながらアート活動が展開していくが、防災まちづくりや住民の日常生活に深く関わるにはハードルが多いことも明らかになった。

そこで第4章では一言地区におけるまちなかアートの役割を提言するため、まず[4 - 1]ではフィールドワークとして筆者が参加した「墨東まち見世 2011」におけるいくつかのプログラム内容と、2名のアーティストの方とアート拠点を運営する方へのインタビュー内容を参考に、向島地域で展開されているアート活動の事例として紹介する。

[4 - 2]では[4 - 1]で紹介したインタビュー内容やアーティストの方との意見交換を参考に、筆者が感じた向島地域のアート活動の特徴を整理する。そして第1～3章との関係を考慮しながら一言地区におけるアート活動の役割を提言する。

[4 - 1] 向島地域のアート活動の紹介 3つの事例から

2009年から始まった「墨東まち見世」は3年目を迎えており、東京都・東京文化発信プロジェクト室・NPO 法人向島学会が主催する。東京都歴史文化財団の「東京文化発信プロジェクト」の一環である「東京アートポイント計画」に基づいており、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指す。他地域とのネットワーク構築や、地域と結ばれたアートイベントの支援に取り組む向島学会は同計画に基づき、向島地域で展開されているアート活動を利用して墨東まち見世を開催することとなった。まち見世は学生や社会人スタッフによる事務局と、地域住民・アーティスト・地元の拠点や団体などのメンバーによる企画会議のもと、プロジェクト企画と運営を行う。「気がつけば、お向かいさんはアーティスト」というキャッチコピーのもと、「地域資源を使った新しい文化発信」「まちなかのアーティストの拠点の応援」「地域の抱える様々なテーマ（商店街振興、福祉、教育など）を共有し、それらに関係する活動の展開」を目標とする。

約1ヶ月に及ぶ会期中のイベント内容は、墨東エリアで活動するアーティスト・拠点・個人や団体などが多彩なプログラムを行う「ネットワークプロジェクト」、テーマごとに墨東エリアをガイドと巡る「まち見世さんぽ」、まちとアートについてアーティストと参加者が意見交換する「まち見世塾」がある。筆者は「まち見世さんぽ」の二つのプログラムに参加した。「アートな路地園芸巡りさんぽ」ではアーティストのC氏、「ウィンドウ・イーティング」ではアーティストのD氏にインタビューをした。また「まち見世塾」ではアート拠点 float を運営する方を始めとして、アーティストの方々と意見交換をする機会があった。[4 - 1]ではこれらの機会を通して得た情報について、向島地域におけるアート活動の3つの事例として紹介する。

(1) アーティスト C氏

< 向島地域でアート活動を行うきっかけ >

1999年に生まれ育った多摩から墨田区の本所に移り住む。向島や京島を歩く中で、軒先や路地という限られたスペースを活用して住民が行う路地園芸を目にした。同地域で多く見られる路地園芸は向島特有の景観やまちの温かい雰囲気醸し出す。大学でアートを学んだC氏はそれらの景観や植物はアートに値すると感じた。自身も趣味で園芸を行っていたが、植物を育てている住民との交流を通して、向島に息づく活気や人の温かさや近所付き合いの楽しさを知った。そこで路地園芸を要素として取り入れたアート活動を行うことで、向島のまちや住民の魅力を紹介したいと考えた。

< 活動内容 >

都市に住む人の自然と共にありたいと願う気持ちが創意工夫という形で現れたものが路地園芸といえる。向島地域以外でも活動を行うが、園芸植物の魅力や力を要素として必ず取り入れたフィールドワークや制作を行う。まち見世では「路地園芸祭」というイベントを行う。「路地園芸からの発信」をキーワードに掲げ、路地園芸の豊かさ・面白さ・特異性を地域の大切な文化として発信する。「路地園芸祭」の詳細は以下の通りである。

「路地園芸人気大賞・植物巡りスタンプラリー」

地図を頼りに参加者が人気投票審査をしながら街中の9つのポイントを巡る企画。全スタンプを集め人気投票をすると参加記念景品が貰え、最終日には人気大賞を決定する。

「すみだ路地園芸・鉢植え寄贈の募集」

墨田区在住の方の鉢植え植物を東日本大震災復興支援のために寄贈してもらい、宮城県の仮設住宅で暮らす方にプレゼントする。少しでも暮らしに彩りを取り戻してもらいたいという趣旨のもと行う。また寄贈された鉢植えの一部を用いて復興を目的としたチャリティー植木市を開催する。

< 活動を行う上で心がけていること >

地域で生活をする住民に配慮しコミュニケーションを大切にしている。路地は生活の場であるため、暗くなってからのフィールドワークや家を覗き込むなどはしない。またスタンプの設置前に住民と話をし、得た情報(植物への愛着や思い出話)はスタンプとともに掲載して紹介する。

< 活動の効果 >

路地園芸は住民の日常生活の一場面であるが、アートという視点で見つめ直すことで、まちの景観や人の温かさという魅力を住民に再認識してもらう。地域外部の人には街中を巡り歩いてもらうことでまちの魅力を知ってもらう。こうしてまちへの関心や愛着を高めることで、園芸の維持発展や何か地域で活動を始めきっかけになり得る。また園芸を通しての住民同士や外部の人とのコミュニケーションを促進させる。

(2) アーティスト D氏

< 向島地域で活動を行うきっかけ >

シェフの仕事をしていましたが、店で料理を提供する以外の枠にとられない形で食について表現したいと考え現代アートを始めた。2002年頃から現代美術制作所のギャラリーでパフォーマンスを行っていたが、次第にケータリングとして街中に出て活動をするようになり、向島地域の魅力に気が付き始める。墨田区在住ではないが以後頻繁に向島を訪れフィールドワークや制作を行う。

< 活動内容 >

食という要素を取り入れた活動に向島以外でも行う。

「ウィンドウ・イーティング」

街に根付く飲食店の外観には沢山の情報が込められており、街の文化や歴史が溢れ出ている。まちの雰囲気や特色を感じ取り紹介するため、個性と工夫に溢れた街中の飲食店を巡り歩き、写真に収める。

「ヒガムコ Sound Table」

東向島珈琲店 というカフェを舞台にする。このカフェは地元の常連客が多く、カウンター席で常連客同士や店主と会話をする様子がよく見受けられる。会話をレコーダーに録音しカウンター席以外でも聞けるようにすることで、常連客以外の様々な人にも、活気のある向島の雰囲気や住民の温かさを感じてもらうことを目的とする。

< 活動を行う上で心がけていること >

住民とのコミュニケーションを心がけている。D氏は向島の最大の魅力は、活気があり温かいまちの雰囲気や、近所付き合いが良く住民同士のつながりが深い点だと考えている。そのような向島の良い面を取り上げ作品に盛り込むようにしている。また活動を通して住民がまちの良さに気が付き、まちに関心を持ち、良さを維持発展するために何か行動を起こすきっかけを作りたいと考えている。

< 活動の効果 >

アートという視点を通してまちの良さに気付くことで、住民がまちに関心を持ち行動を起こすきっかけになること。墨東まち見世を例にすると、アーティスト以外の住民がまち見世に参加したり、アートに興味を持って活動に加わる人が出始めた。まだ一部ではあるが、自分達で活動を始めまちを元気にしよう、色々な人と交流できる機会や場を作ろう、と考え行動に移す人が増えてきた。D氏はいずれアーティストなしでも、住民自身が活動を始めたり、積極的にコミュニケーションを図るようになればよいと考える。

(3) アート拠点 float

< 向島地域でアート拠点を作るきっかけ >

・学生時代に学んだ建築と、現在の仕事とのギャップを感じており、学んだことを生かせ

<p>るような場所を作ろうと考えた。</p> <p>・アーティストが街中でアート活動に取り組めるような場が欲しかった。</p>
<p>< 活動内容 ></p> <p>向島地域では年に2か所位のペースでオルタナティブスペースができています。文花2丁目にある float は元々プレス工場だった空間を利用したオルタナティブスペースである。このようなスペース運営に携わるのはアーティストが多いが、float では建築系の仕事の従事者も所属し8人のメンバーで構成される。まち見世では今後 float をシェアアトリエ・ギャラリー・イベントスペースとして運営していくための空間作りを参加者と一緒に行う。</p>
<p>< 活動を行う上で心がけていること ></p> <p>まちに開かれた拠点作りを目指す。float の両側の扉はそれぞれ道路に面していて通り抜けられる。この立地を生かし両側の扉を開けておくことで住民に通り抜けてもらう。その際に制作の場や作品を見てもらい住民と交流をする。このようなアーティストのまちへの入り方や交流の仕方もアート作品の一部になり得る。</p> <p>まちに開かれた拠点にしようと考えたきっかけは、下町の人情に溢れていて近所付き合いを大切にしている向島で活動するからこそ、まちと一体にしたいと考えたからである。都市化して近隣関係が薄くなった現在において、まちに開かれていてある意味生活上のプライバシーの無いような従来までの暮らし方に憧れを感じた。</p>
<p>< 活動の効果（目標） ></p> <p>地域に開かれた拠点にすることで住民の日常生活の中でアートに触れたり感じられる場所を作る。感性や感覚に訴えるアートの手法を取り入れることで、住民を始めとした人々が何かを考え行動を起こすきっかけにしたい。また float があることでアーティスト同士、アーティストと住民、住民同士が交流できる場としたい。</p>

[4 - 2] 一寺言問地区におけるまちなかアートの役割

まずは[4 - 1]で紹介したインタビュー内容やアーティストの方との意見交換を参考に、筆者が感じた向島地域のアート活動の特徴について、第3章で紹介した「まちなかアート」の一般的な特徴と照らし合わせながら整理する。その後一寺言問地区におけるまちなかアートの役割について提言する。

(1) 向島地域のアート活動の特徴

まちを意識したアート活動

向島地域というまちへ出てアート活動を行う目的はアーティストによって様々であるが、大きく3つに分けられる。1つ目の目的は「制作・イベント・フィールドワークなどのアート活動の成果を紹介すること」である。入場料を払って参加する美術館ではなく街中で

活動を行うことで、普段はアートに関心のない人でも目に付きやすく、活動を見てもらいやすい。その結果2つ目の目的の「様々な人からのフィードバックを得ること」ができる。フィードバックを得ることでアーティスト自身が気付く点も多く成長につながる。特に子供からのフィードバックは新鮮で、驚くほど鋭い質問も多いそうだ。

3つ目の目的は「アート活動の成果を地域に還元すること」である。もちろんアーティストごとに活動目標や内容は異なり、地域を変えたり良くすることだけを念頭に置いているわけではない。しかしB氏へのインタビューの際、「まちづくりを目的にアート活動をしてほしいわけではない。しかし向島という場所でアートを行う意味を考え、表現のどこかに取り入れてほしいし、そのような考えを大切にすることをアーティストに向島に呼び込んでいきたい。」というお話を伺った。アーティスト達のまとめ役を担うB氏自身も、向島学会に所属していて一言会を始めとしたまちづくり団体と交流できるという立場を生かし、アーティスト同士の意見交換の場や、アーティストがまちや住民と関わる仕掛けを作るように心がけている。その結果人がまた人を呼ぶという形が続き、向島にはC氏やD氏のようにまちを意識した活動を行うアーティストが多い。

それではアーティストはまちへの意識をどのように作品に反映させるのか。フィールドワークを通して筆者が感じたのは、アーティストはまちに秘めた可能性を見抜く力、それを人に伝えるために表現する力を持つということである。まちに秘めた可能性の捉え方はアーティストによって異なるが、住民が普段はなかなか意識しなかったり当たり前と捉えているような地域が抱える特色や資源に対して、アーティストはアートというアプローチを用いることで光を当てる。特色や資源とは空き地や空き家といった遊休資源のこともあれば、昔から続く下町文化といえる近所付き合いの良さやまちの活気やお人よしの人情のこともあれば、まちの景観のことかもしれない。これらに光を当てることで住民のまちに対する関心を高め、空き家の活用方法を考えるといった例のように、アーティストの活動に参加したり、自ら行動を起こすきっかけになり得る。またアートは発信力があるため、地域外部の人やアートなしでは関わりのなかった人との出会いや交流を持つこともある。このようにしてまちを意識したアート活動は、アーティスト同士・アーティストと住民・住民同士のつながりを生む可能性を秘める。

活動の担い手のネットワーク

(1)で述べたまちを意識したアート活動を支えているのは活動の担い手のネットワークである。それは1980年代後半から始まる防災まちづくり、1990年代後半の防災まちづくりからアート活動への流れ、現在まで続くアート活動の広がりの中で培われたものである。一言会による防災まちづくりは住民主体で進められたことで、率先して活動に取り組む数名のリーダーが生まれた。そして安心して暮らせるまち・次世代に残せるまちを目標に掲げ積極的に活動を担うようになる。彼らは京島地域の防災まちづくりのリーダーや、文化系の活動を行う川の手倶楽部のリーダーとも交流を深めていく。こうして形成

されたまちづくりの担い手のネットワークを生かし、アートというアプローチを取り入れたイベントを開催することで、向島地域においてアート活動が展開されていく。

1997年に設立された現代美術製作所はアーティストのまとめ役という立場を担う。現代美術製作所ではアーティスト同士の交流や意見交換の場を積極的に設けている。この結果向島ではアーティスト同士の交流を大切にし、他のアーティストとのバランスを考えながら自分の立ち位置を見出して活動するアーティストが増えた。代表のB氏は向島学会に所属することで既存のまちづくり団体との交流や理解があり、アーティストがまちや住民と関わる仕掛けを作るように心がけている。2002年に設立された向島学会は向島地域のアート活動を支援する役割、向島地域に関心のある各種団体や個人を結び付ける役割を担う。向島学会にはA氏を始めとした一言会の代表的な人物も所属している。

以上より向島地域のアート活動のもう一つの特徴は、防災まちづくりの始まりからアート活動が展開する流れの中で培われた活動の担い手のネットワークといえる。アート活動が地域に根付くことの難しさは第3章で指摘した通りである。しかし活動の担い手のネットワークが存在することで相互の理解や協力関係が生まれ、まちを意識したアート活動の展開やアーティストへの啓発にもつながる。この傾向は年々高まっている。具体例として防災まちづくりとアート活動が連携することで開催された「イザ！カエルキャラバン」というイベントを紹介する。

「カエルキャラバン」は一言会が2009年から年に一度開催しているイベントである。三町会合同防災訓練と合わせて開催される子供向けの防災体験ワークショップであり、阪神淡路大震災の被災者の方々の体験をもとに、いざという時に必要となる知識や情報を楽しみながら学習できるプログラムとなっている。このイベントは東京都文化発信プロジェクトが提案し、百年後に子供達に残せるまちを目指す一言会と連携して開催したものである。イベントは他世代の参加を目指しており、スタッフに関しても一言会に加えて町会関係者・区職員・近隣の高校の生徒など多様である。一言会のメンバーは発足当初から若い人が少ないという事情を抱えており、イベントなどの活動には幅広い年代の住民に参加してもらいたいと考えている。そのためにアートというアプローチを防災まちづくりに取り入れることで、若い世代を始めとした幅広い層の地域への関心を高め、住民同士の交流の促進を目指している。

(2) 一寺言問地区におけるまちなかアートの役割

以上より当論文の研究目的また結論である一寺言問地区におけるまちなかアートの役割とは、〈ソーシャルネットワーク(人とまちのつながり・人と人のつながり)を構築すること〉であると筆者は考える。これは一言会による防災まちづくりとの関係性をもとに考察した結果である。

一言会の防災まちづくりは切迫した防災上の課題を解決するために始まるが、それと同時に一言地区はインナーエリアが抱える問題である地場産業の衰退・転出、人口減少と高

齢化、家屋や施設の老朽化から生じる下町文化の衰退という問題を抱えていた。これはまちの活気や近所付き合いの良さといった下町文化を生かしてまちづくりを進めようとしていた一言会にとって懸念材料であったため、下町文化の活性化にもつながるようにハードの部分にも景観・歴史・文化を取り入れた活動を展開していく。1990年代の後半にはハードの部分を中心とした活動の限界、インナーエリアが抱える問題の深刻化、幅広い層の住民のまちに対する関心を高め参加につなげる必要性から、下町文化の活性化という面も含んだソフトの部分のアプローチを模索し始める。その際に一言会のまちづくりに組み込まれたソフトの部分の対策や、培われたネットワークが下地となり、他のまちづくり団体との連携のもとに開催されたアートというアプローチを取り入れたイベントを経て、アート活動が展開されていく。現在の一言地区におけるアート活動は一言会の活動と直接結び付いているわけではないが、現代美術制作所や向島学会が存在することでまちを意識したアート活動を心がけていると同時に、活動の担い手間には交流がありネットワークに広がりが見られている。この結果「カエルキャラバン」の例のように、アートと防災が連携した活動が行われ始めた。

それでは＜ソーシャルネットワーク（人とまちのつながり・人と人のつながり）＞とは何を意味するのか。＜人とまちのつながり＞はアーティストが持つまちに秘めた可能性を見抜く力、それを人に伝えるために表現する力から生じる。住民が普段はなかなか意識しなかったり当たり前と捉えているような地域が抱える特色や資源に対して、アーティストはアートというアプローチを用いることで光を当てる。向島地域にはまちで生活する住民への配慮やコミュニケーションを大切にしているアーティストが多く、根気強く本気で取り組むことや、自分から情報発信することを心がけている。まちなかアートの特徴の一つに活動のプロセスを重視するということもあり、このようなアーティストのまちへの入り方や住民との交流も作品に含まれ、鑑賞者との共同作業により制作を行う例も多い。これにより住民のまちに対する関心を高め、アーティストの活動に参加したり、自ら行動を起こすきっかけになり得る。防災まちづくりについて考えると、防災一辺倒ではなかなか敬遠されがちのところを、アートという新たな視点を取り入れることで、今までは地域への関心の薄かった人が活動を始めるきっかけとなることが期待される。

この結果生じるのが＜人と人のつながり＞である。つながりが生まれるのは活動の担い手達やアーティスト間に限らない。アートがまちに対する住民の関心を高め、アーティストの活動に参加したり自ら行動を起こすことで、新たな出会いや交流を生み、それがまた活動へと発展していく。さらにアートは外部への発信力があるため、地域外の人々のまちへの関心を高め、交流につながる可能性もある。このような＜人と人のつながり＞は一言地区が地場産業の衰退・転出、人口減少と高齢化、家屋や施設の老朽化から生じる下町文化の衰退という懸念材料を抱える中で、下町文化の活性化を担う役割としても期待される。

（３）地域におけるソーシャルネットワークの必要性

まちなかアートの役割とはソーシャルネットワーク（人とまちながりのつながり・人と人のつながり）の構築であると提言した。そこで最後に文献³を参考に整理した神戸市長田区真野地区の事例を紹介することで、地域におけるソーシャルネットワークの必要性について述べる。

住工混合地区である真野地区は一言地区と同じくインナーエリアといえる。地区内の住宅の半分以上が戦前に建てられた老朽住宅であり、家屋や施設の老朽化、地場産業の衰退・転出、人口減少と高齢化といった問題を抱える。真野では町工場の林立による公害問題が1950年代後半に増加した。住環境が極端に悪化し、住民が他地区へ流出し人口が激減した。こうした中で地区住民は1966年から生活防衛のための公害追放運動を展開する。一般に公害反対の住民運動は一つの問題が解決すると終了する。ところが真野では、地区外に追放した工場の跡地利用ということで、跡地を市に買い上げさせて保育所や公園をつくらせるという形で、1972年頃から子供の遊び場作り・緑化運動へと展開する。

1975年からは住民人口の減少と高齢化という背景から、地域医療・地域福祉の運動を行い、主に高齢者を対象にしたサービスを展開する。老人福祉・地域医療の活動が充実するとともに運動はやがて質的に大きな転換を遂げ、1978年頃から「まちづくり構想」の段階に入る。まちづくり構想とは根本的な地区の改造を目指すものである。までは住民の健康と生活を守るなど防衛的な活動に終始してきたが、活動を繰り返すうちに何か欠けているものがあるのではという疑問に突き当たり、試行錯誤の末に到達したのが根本的な地区の改造である。こうして1977年には住民代表と神戸市とで「まちづくり懇談会」を発足させ、まちづくりの目標を練り上げた。真野地区の基本的な問題は工場と住宅が混在していることと、大正年間に建てられて戦災に遭わなかったために老朽化した木造の長屋が多いことである。したがって地区改造もこの2点を中心に展開する。

真野地区のまちづくりが継続すると同時に活動が発展した最も大きな要因は、まちづくりが住民の創意と工夫を生かしながら、一つの活動がそれだけで完結せず、開かれた活動として発展的に他の活動と結びついている点である。1960年代から約30年におけるまちづくりの歴史の中で、真野地区では住民主体のボトムアップ型の活動を通して、地域に目を向けて課題を解決する基盤と、担い手のネットワークの形成が進んだ。

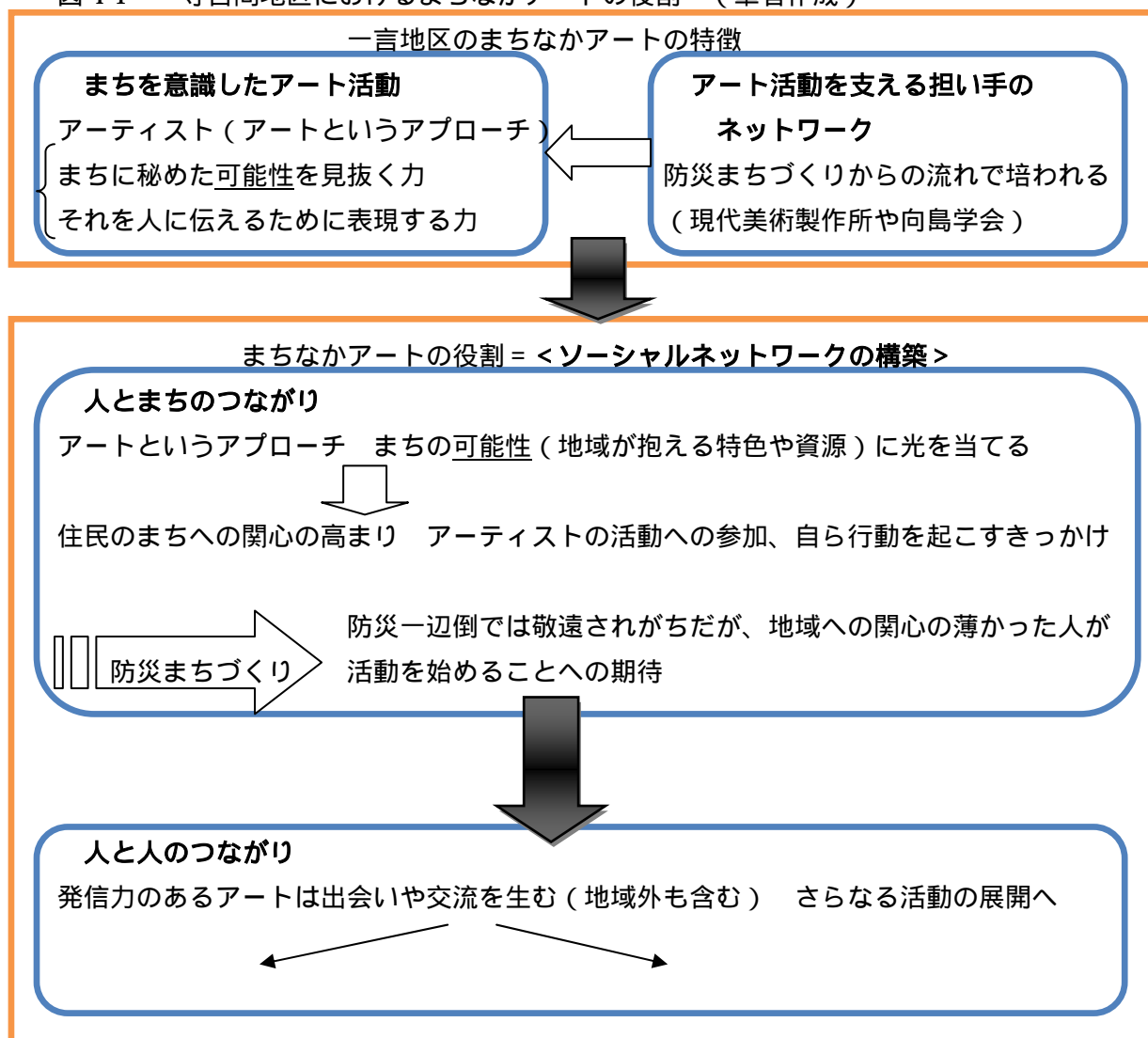
これらを最大限に生かしたのは阪神淡路大震災の際である。真野では震災時の救助・救援の際に近隣住民の互助による活発な救助・救援が行われ、被害を最小限に抑えた。震災発生当初は住民の初期消火活動で0.35haの消失に食い止め、ビル倒壊で生き埋めになった10人の人達を住民だけで救出した。発災後3日目には住民が立ち上げた「災害対策本部」が地区住民全員分の食事を各戸に配布するために、ピラミッド型の体制を1週間で作り上げた。その後の復興・生活再建時においても課題を解決する基盤とネットワークは力を発

3 「インナーシティのコミュニティ形成」、今野裕昭、2001 を参考にする。

揮した。真野では高齢化が進み、老夫婦2人暮らしや1人暮らしの高齢者が多く、生活補完として近隣に頼る人が多い。震災後には避難所や仮設住宅への移動を余儀なくされ、近隣とのつながりを切断されやすいが、真野地区の災害対策本部では高齢者にたえず目線を向けており、災害弱者になるのを防いだ。

震災前にまちづくり活動がなされなかった地区では被害が大きく、復旧や復興が遅れがみられた。このように真野の事例からは、災害時には共助ともいえる近隣間の助け合いが大切であることが明らかになった。そのために普段の生活の中からまちに対する関心を高めて地域の課題を解決する基盤を作り、活動を通して近隣を始めとした住民同士のコミュニケーションを深めていく必要がある。そのような防災まちづくりにおいても、ソーシャルネットワークとして人とまちのつながり・人と人のつながりを構築する役割を担うまちなかアートが貢献する可能性を秘めている。

図 4-1 一寺言問地区におけるまちなかアートの役割 (筆者作成)



終章 論文のまとめ

[1] まとめ

論文のフロー図

序章 研究目的

[1]問題意識、研究目的 [2]仮説 インナーエリア の考え方 [3]論文構成

第1章 一寺言問地区の地域特性

[1 - 1]地理

[1 - 2]歴史 木造住宅密集地域の形成

[1 - 3]人口 少子高齢化の進行

[1 - 4]産業 地区内産業の衰退

[1 - 5]地域特性とインナーエリアが抱える問題の結び付き

第2章 一寺言問地区の防災まちづくり活動

[2 - 1] 住民主体の防災まちづくり活動の始まり

[2 - 2] 防災まちづくり組織“一言会”の設立

[2 - 3] 一言会の活動

[2 - 4]

一言会による防災まちづくりがもたらしたもの

第3章

防災まちづくりとアート活動の関係性

[3-1]「まちなかアート」の誕生

[3-2] 向島地域におけるアート活動の展開

[3-3] 防災まちづくりとアート活動の関係性

第4章 一寺言問地区におけるまちなかアートの役割

[4-1]向島地域のアート活動の紹介

[4-2]一寺言問地区におけるまちなかアートの役割

・ 向島地域のアート活動の特徴

・ 一寺言問地区におけるまちなかアートの役割

・ 地域におけるソーシャルネットワークの必要性

終章 論文のまとめ

[1] まとめ

[2] 論文の意義

[3] 終わりに

序章では研究目的について整理した。＜防災まちづくりが抱えきれなかった課題を受け継ぐような形で、アートという新たなアプローチが地域に取り入れられるようになったのではないか。＞という仮説のもと、＜防災まちづくりとアート活動の関係性を明らかにすること。両者の関係性をもとに一寺言問地区におけるまちなかアートの役割について考察を行うこと。＞という研究目的を立てた。仮説のもとになっているのは インナーエリアという考え方である。インナーエリアとは住工混在地域を指し、多くの場合地場産業の衰退・転出、急激な人口減少と高齢化、家屋や施設の老朽化といった問題を抱える。これらの結果生じるのが下町文化の衰退である。下町文化とは職住近接型の生活スタイルから育まれる濃密で相互扶助的な人間関係が、近隣という空間的領域の中でネットワークとして維持されている文化ということができる。

住工混在地域である一言地区はインナーエリアといえるが、序章で整理したインナーエリアが抱える問題は一言地区にも当てはまるかを調べるため、第1章では統計データをもとに一言地区の地域特性を整理した。一言地区は明治時代以降の産業化や東京の発展に伴い工場や住宅が急激に増加した。農村であった土地の整地前に建設ラッシュが進んだため、現在まで続く木造住宅密集地域が形成され、家屋が老朽化している。産業化に伴って製造業が地域経済と雇用を支えてきたが、近年は複数の社会変動を受け、製造業を始めとした各分類別の事業所数は減少し、地場産業の衰退・転出を招く。これにより職住一体の生活スタイルから生じる緊密な人間関係にも変化があると想定できる。さらに産業の衰退は人口の流出と高齢化を招くと同時に、空き工場にマンションが建設されることで地区内の新住民層が増加した。以上より一言地区にはインナーエリアが抱える問題群が当てはまることが明らかになり、その結果下町文化の衰退という状況にあるということができる。この状況は下町文化を生かして防災まちづくりを進めようとしていた一言会にとって懸念材料であると同時に、アート活動が展開され始める背景の一つにあたる。

第1章で整理した問題の中でも特に防災上の課題の解決が急務であったことから、一言地区では1980年代後半より一言会による住民主体の防災まちづくり活動が始まる。当論文は防災まちづくりとの関係性をもとに一言地区におけるまちなかアートの役割について考察を行うことを研究目的とするため、第2章では一言会による防災まちづくり活動を整理する。1996年の防災生活圏モデル促進事業終了時の防災まちづくりは、ハードの部分を中心とした活動により地区の防災性を高めた。さらに住民から構成される一言会が中心となることで、それらの活動には景観・歴史・文化面の工夫が組み込まれていたり、下町の良さを生かしてまちづくりを促進させることを目指した。これらが下地となり、さらにハードの部分の活動の限界・インナーエリアが抱える問題・まちづくりの担い手の偏りが露呈したことで、一言会ではソフトの部分としての新たなアプローチを模索していた。

新たなアプローチとして向島地域で展開され始めるのが、第3章で整理したアート活動である。一言会が新たなアプローチを模索する中でアート活動の展開に大きな役割を果たしたのが、向島地域で文化というアプローチのもとにまちづくりを行っていた川の手倶楽部である。かねてから交流があった一言会・川の手倶楽部・京島まちづくり協議会は連携のもと、アートというアプローチを取り入れたイベントを展開する。その過程ではアーティストのまとめ役を担う現代美術製作所や、まちづくり団体同士や向島に関心を持つ地域内外の人のネットワーク構築に貢献する向島学会が設立され、アート活動の支援に積極的に取り組んでいく。アート活動は一言会の防災まちづくりが抱えていた問題を受け継ぎ、アートというアプローチを通すことで地域をポジティブな見方で捉え直し、その結果幅広い層の地域への関心や行動を呼び起こしてつながりを構築することを目指していたといえる。一方で一言会の防災まちづくりに直接関わることは難しく、アートが住民の日常生活に根付くにはハードルが多いことも明らかになった。

そこで第4章では一言地区におけるまちなかアートの役割について提言するため、フィールドワークを通して筆者が考えた内容が中心となる。筆者が考える向島地域におけるアート活動の特徴は2点ある。1点目はまちを意識したアート活動を行っている点である。アーティストはまちに秘めた可能性を見抜く力、それを人に伝えるために表現する力を持つ。住民が普段はなかなか意識しなかつたり当たり前と捉えているような地域が抱える特色や資源に対して、アーティストはアートというアプローチを用いることで光を当てる。2点目はまちを意識したアート活動を支える担い手のネットワークである。これは1980年代に始まる防災まちづくりからの流れの中で培われたものである。アート活動が地域に根付くことの難しさは第3章で指摘した通りである。しかし活動の担い手のネットワークが存在することで相互の理解や協力関係が生まれ、まちを意識したアート活動の展開やアーティストへの啓発にもつながる。

以上の特徴から考える一寺言問地区におけるまちなかアートの役割とは、〈ソーシャルネットワーク(人とまちのつながり・人と人のつながり)を構築すること〉であると筆者は考える。人とまちのつながりとは、アートというアプローチを通して地域が抱える特色や資源に光を当てることで生じる。これらに光を当てることで住民のまちに対する関心を高め、アーティストの活動に参加したり、自ら行動を起こすきっかけになり得る。防災まちづくりについて考えると、防災一辺倒ではなかなか敬遠されがちなところを、アートという新たな視点を取り入れることで、今までは地域への関心の薄かった人が活動を始めるきっかけとなることが期待される。

この結果生じるのが人と人のつながりである。アートが新たな出会いや交流を生み、それがまた活動へと発展していく。さらにアートは外部への発信力があるため、地域外の人々のまちへの関心を高め、交流につながる可能性もある。人と人のつながりは一言地区が下

町文化の衰退という懸念材料を抱える中で、下町文化の活性化を担う役割としても期待される。さらに阪神淡路大震災以降、共助の大切さが明らかになった防災まちづくりにおいても、ソーシャルネットワークとして人とまちのつながり・人と人のつながりを構築する役割を担うまちなかアートが貢献する可能性を秘めている。

図 1-4 (再掲) 一寺言問地区の地域特性 (筆者作成)

江戸時代 ・ ・ 江戸の大改造に着手

< 本所地域 >

1657 年の振袖火事以降の開拓 1700 年には整然とした街並みと道路の完成
武家地・町人地・寺社地・百姓地が入り混じる独特の
景観を形成

< 向島地域 >

江戸への農産物供給地として発展

隅田川沿いは景勝地・行楽地・別荘地として多くの人を訪れる 料亭文化の生成

明治時代 ・ ・ 東京の発展と産業化

地価が安く水運の便が良いなど地理的好条件にある墨田区域には近代的な工場が続々と建てられ、近代産業の中心地として発展していく。(例 1890 年 鐘ヶ淵紡績会社)

大正時代

1914 年 第一次世界大戦後 墨田区域の紡織工場は国内繊維産業を盛況に導く原動力

1923 年 関東大震災 墨田区域は大きな被害を受ける



< 向島地域 >

日常消費品生産をする大中小の工場や下請けの町工場が殺到

労働者が集まり、墨田区域の人口が増加する(1940 年頃まで)

労働者のための住宅・飲食店・娯楽機関が多数建てられる

田園地帯の名残は薄れ、無秩序な不良住宅の密集地帯に変貌していく

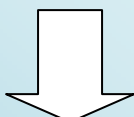
昭和時代～平成

1945年 太平洋戦争により墨田区域は壊滅的な被害 人口は戦前の25%にまで減少

1947年 本所区と向島区が統合して墨田区が誕生 地理的好条件により復興が進む

1950年 朝鮮戦争による特需景気

- ・墨田区の産業全般が活性化
- ・向島地域では下請工場や関連家内工場が集積 再び人口の増加（1965年頃まで）
細く入り組んだ路地における木造住宅密集地域が再形成



複数の要因
(産業構造の転換、高齢化と後継者不足)

1960年代前半 大工場の地域外移転

1960年代～70年代 小零細化の増加とその比重の上昇

1980年代 工場数の減少と小零細化の同時進行

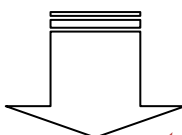
- ・東京都はもとより国内で占める位置の低下
一言地区では事業所数の減少（小規模事業所で顕著）
廃業による空き店舗や空き工場は防災防犯面や環境面で多くの問題
- ・製造業が雇用力を失い若年労働者が減少
人口の減少と深刻な高齢化
職住一体となったライフスタイルや、そこから育まれる近隣関係を中心とした
緊密な人間関係の変化
- ・マンション建設などによる人口増加により人口減少は小さくなる
生活や意識の質が異なる住民層（新住民）が住み始める

インナーエリアが抱える問題群 = 一寺言問地区の地域特性

家屋や施設の老朽化

地場産業の衰退・転出

人口減少と高齢化



下町文化の衰退へ

図 2-1 (再掲) 一言会による防災まちづくり活動がもたらしたもの (筆者作成)

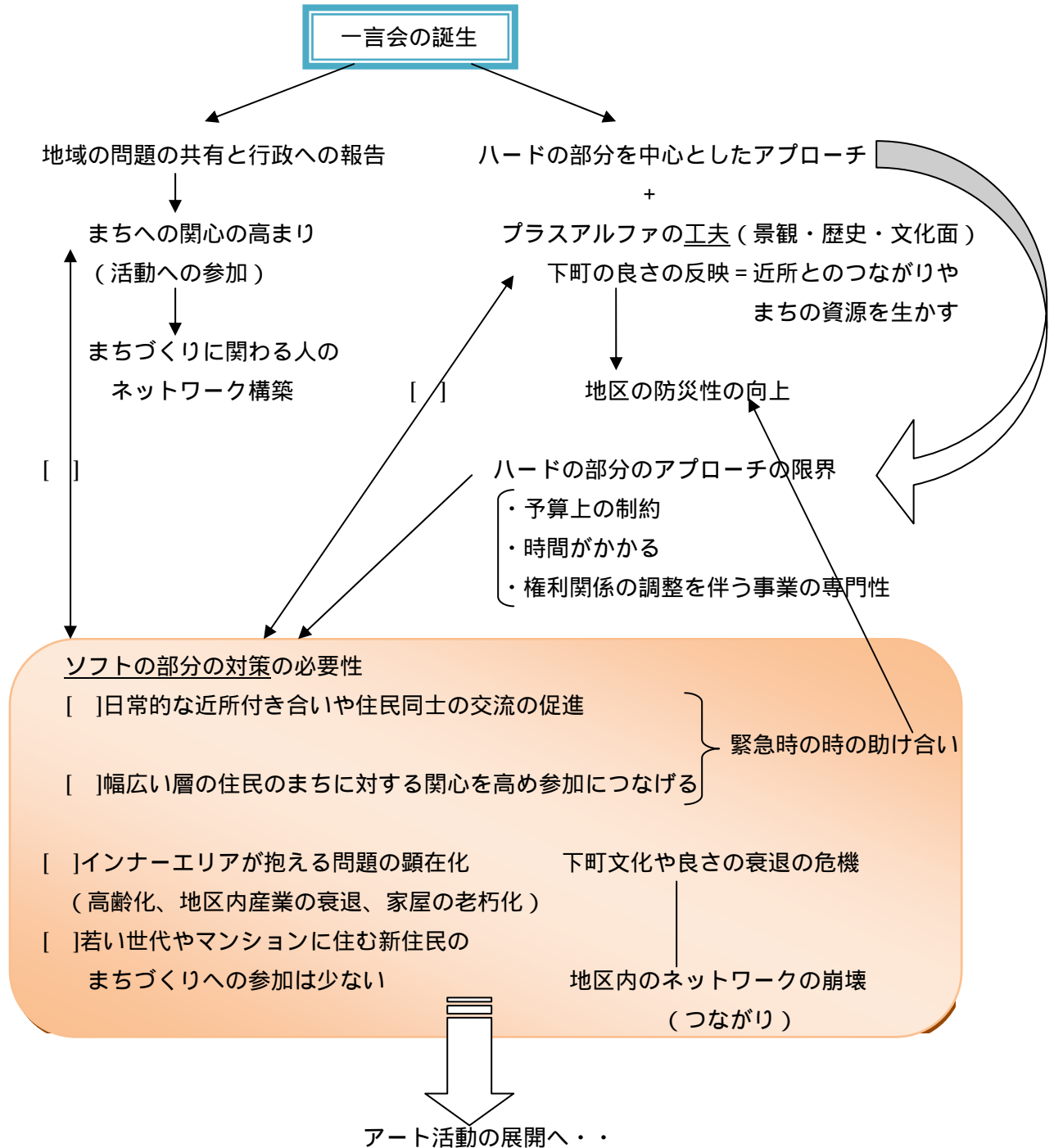
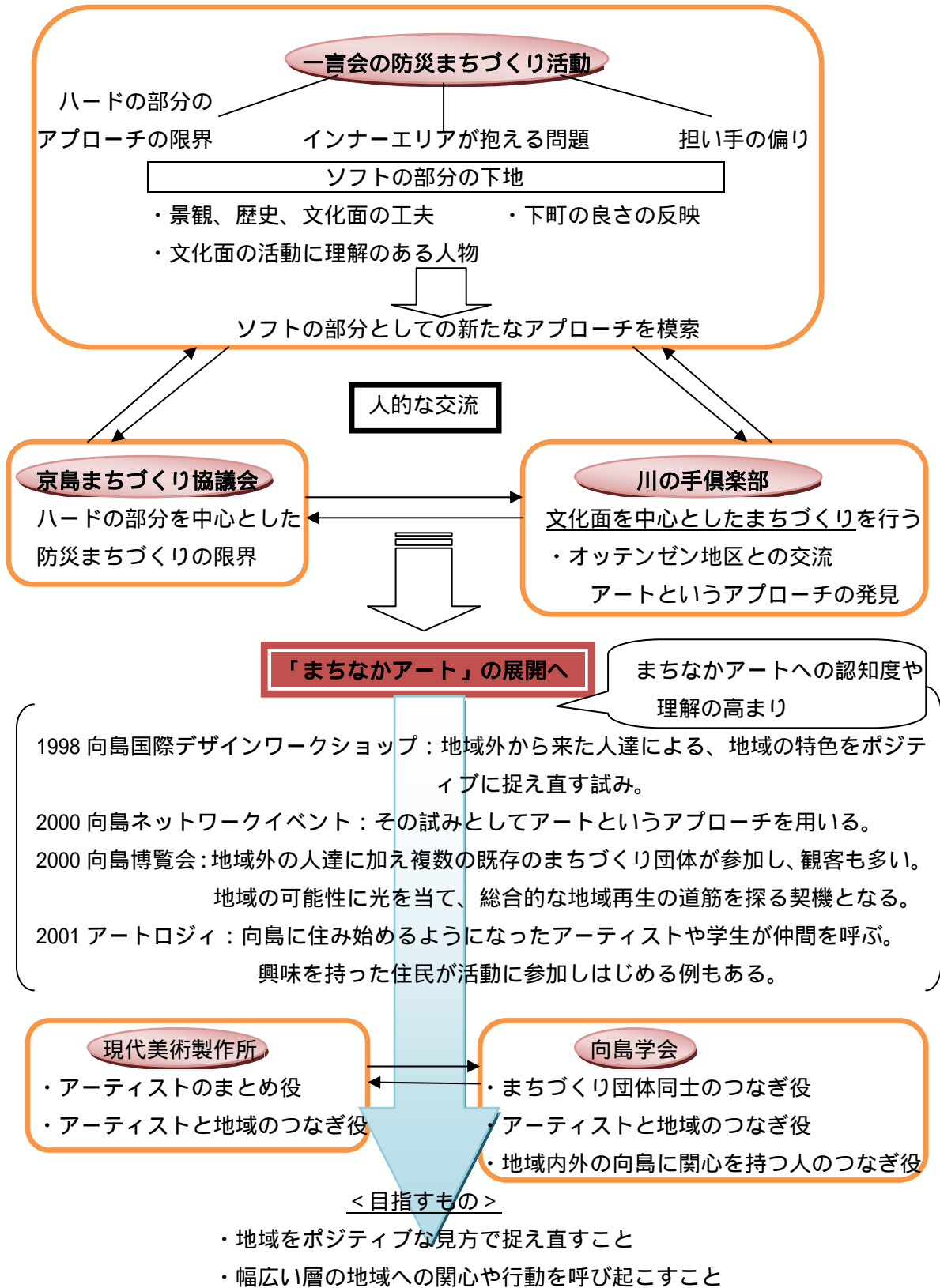
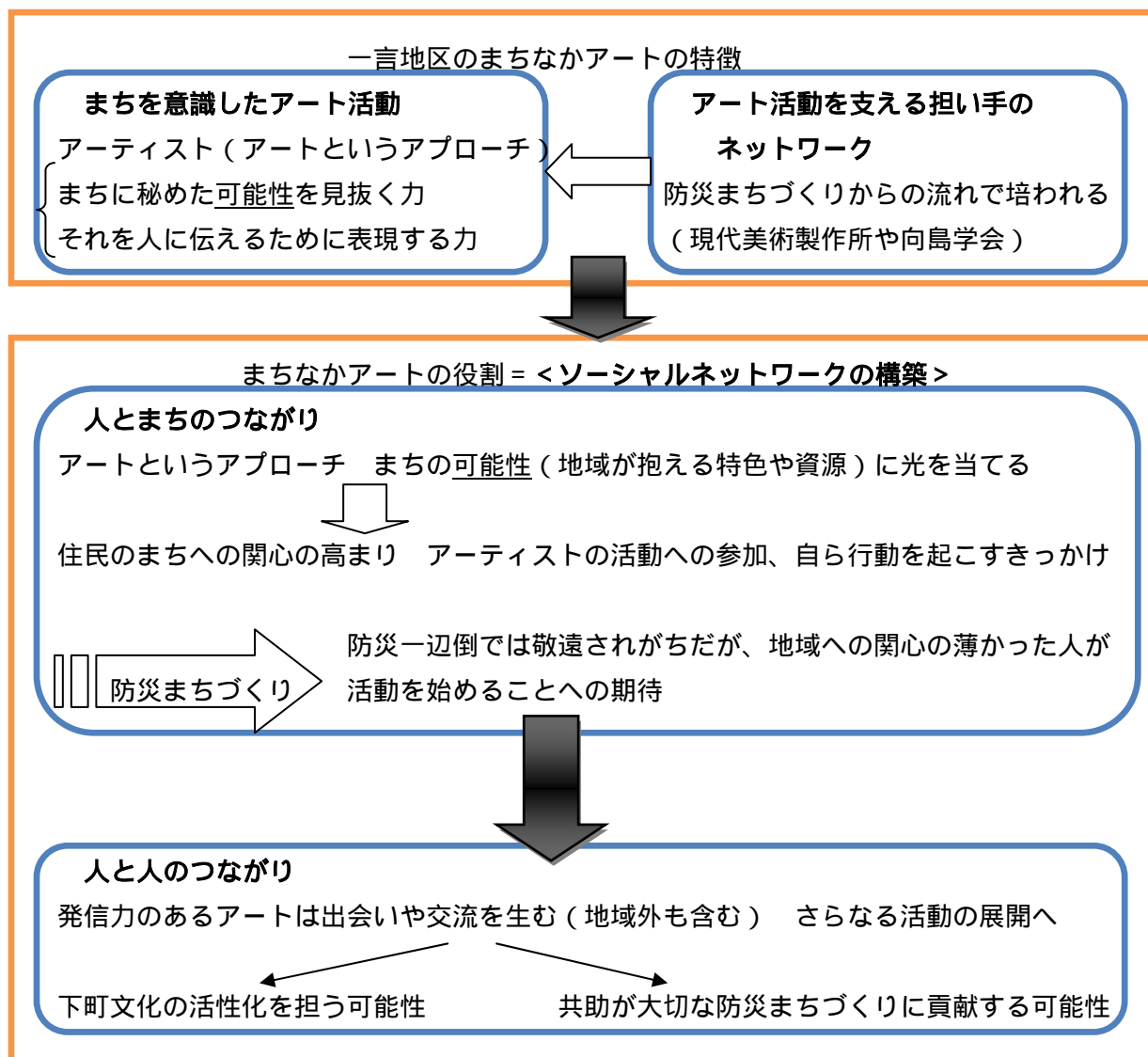


図 3-2 (再掲) 防災まちづくりとアート活動の関係性 (筆者作成)



・つながりを構築すること

図 4-1 (再掲) 一言言問地区におけるまちなかアートの特徴 (筆者作成)



[2] 論文の意義

当論文の意義は大きく2点あると考えている。1点目は一言地区における防災まちづくりとアート活動の関係性について、インタビューや統計データといった筆者自身の情報収集によって整理できた点である。防災まちづくりとアートをそれぞれ扱った先行研究は数多くあったものの、両者の関係性を扱った先行研究はあまり無かったため、この部分に意義があると思う。

2点目は防災まちづくりの流れを受けたものとしてアート活動の展開を整理し、そこにフィールドワークを通して筆者が考えたまちなかアートの特徴を加えることで、一言地区

におけるまちなかアートの役割を提言できたことである。近年全国の至る所でまちなかアートが行われている一方で、その効果をどのように考えるかは難しいと言われている。その中で既存のまちづくり活動との結び付きの中で展開されてきた向島地域のまちなかアートは先進事例といえるのではないか。筆者が提言したソーシャルネットワークの構築というまちなかアートの役割は、インナーエリアにおける下町文化の活性化や、共助が大切な防災まちづくりに貢献する可能性がある。そしてその役割を生むためにはまちを意識したアート活動と、それを支える担い手達のネットワークが必要であるという内容は、今後ますますまちなかアートが盛り上がりを見せると思われる中で、一つの参考になることを期待したい。

[3] 終わりに

テーマの決定から論文を書き上げるまで多くの困難があり、辛い時期も多々ありました。しかし幾度となく相談に乗って頂きアドバイスをくださった浦野先生に御礼を申し上げます。また3年時から面倒を見てくださった1期生の皆様、的確な質問で多くのことを気付かせて下さった3期生の皆様、そして2年間嬉しいことや大変なことを一緒に乗り越えてゼミ活動や卒業論文に励んだ2期生の皆様には感謝の気持ちで一杯です。

またお忙しい中丁寧にインタビューに応じてくださった一言会のAさん、現代美術製作所のBさん、アーティストのCさんとDさんを始め、フィールドワークや統計データを集める際など、お世話になった多くの方々に改めて御礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

参考資料

[参考文献]

- 「大都市社会のリストラクチャリング」、高橋勇悦、1992、日本評論社
- 「インナーシティのコミュニティ形成」、今野裕昭、2001、東信堂
- 「瀬東 向島の道」、鈴木都宣、2000、文芸社
- 「すみだ街歩きガイド」、墨田区観光協会、2010
- 「現代に生きるまち」、佐藤滋、1990、彰国社
- 「地域社会の政策とガバナンス」、岩崎信彦、2006、東信堂
- 「密集市街地のまちづくり」、黒崎羊二、2002、学芸出版社
- 「まちづくりの科学」、佐藤滋、1999、鹿島出版会
- 「社会とアートのえんむすび」、森司、2001、ドキュメント 2000 プロジェクト実行委員会
- 「企業の社会貢献と現代アートのまちづくり」、三浦典子、2010、溪水社
- 「現代アート入門の入門」、山口裕美、2002、光文社
- 「川の手向島宣言」、川の手倶楽部、1990
- 「造景 3 2 巻」、2001～2004、建築資料研究社

[行政資料]

- 「墨田区勢概要 2 0 1 0」、墨田区企画経営室、2010
- 「墨田区基本計画」、墨田区企画経営室、2006
- 「墨田区史」、墨田区役所、2010
- 「墨田区史 上巻・下巻」、墨田区役所、1979

[論文]

- 「東京向島地域の変遷と地域特性を踏まえたランドスケープ遺産に関する研究」、高久薫、
2007
- 「参加型まちづくりのソフトウェアの考察」、山本俊哉、1993
- 「NPOのまちづくり運動」、山本俊哉、1999
- 「パートナーシップによるまちづくりの研究」、村林正次、1993
- 「アート集積地の特性と創造環境整備に関する研究」、中嶋裕、2008
- 「改善型整備事業における住民協議会による地域空間制御のとりくみ」、乾康代、1994
- 「下町路地における居住者主体のエディブル環境形成に関する研究」、癸生川祐介、2005
- 「下町路地空間における居住者に有効なエディブル環境形成に関する研究」、癸生川祐介、
2004
- 「墨田区東向島地区における 1980 年以降の市街地更新と住宅供給の実態」、真野洋介、2003

[参考URL]

総務省統計局 HP <http://www.stat.go.jp/>

墨田区役所 HP <http://www.city.sumida.lg.jp/index.html>

消防科学総合センターHP

http://www.isad.or.jp/cgi-bin/hp/index.cgi?ac1=IS01&ac2=h8jirei&ac3=132&Page=hpd_view

墨田区東向島宮元町会 HP <http://www.justmystage.com/home/smiyamoto/>

一言会 HP <http://hitokotokai.com/>

川の手向島センターHP

http://www.tokyo-machidukuri.or.jp/machi/vol_38/m38_02_04.html

http://tokyo-machidukuri.or.jp/machi/vol_28/m28_03.html

向島国際デザインワークショップ HP

<http://133.13.185.182/TransitCityMukojima/03frame.html>

<http://www15.ocn.ne.jp/~g-caf/events/workshop/workshop1.htm>

向島地区町会自治会総連合会HP

http://www.city.sumida.lg.jp/sumida_kihon/jyoureigadekirumade/giziroku2.files/sankoushiyou6.pdf#search

SONOTA HP http://udit.sakura.ne.jp/town87/454_1.html

向島博覧会 HP

<http://www.sunfield.ne.jp/~cf-sarai/mukoujima1.htm>

<http://event.telescoweb.com/node/2338>

http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Desert/1469/0111_mukoujima_m5.html

<http://www002.upp.so-net.ne.jp/magnet/dts/soga.html>

e-すみだ HP <http://e-sumida.gr.jp/>

現代美術製作所 HP

<http://apm.musabi.ac.jp/imsc/cp/index.html>

<http://www15.ocn.ne.jp/~g-caf/>

歩いて暮らせる街づくりプロジェクト HP

<http://www.kantei.go.jp/jp/kakugikettei/991220aruitemati.html>

[その他]

「墨田区郷土資料館 展示資料」2011年6月に閲覧

「路地サミット in すみだ 配布資料」

「墨東まち見世 2011 配布資料」